東大－野村 大学経営ディスカッションペーパー
No. 11

東京大学基金を支える寄付者の方々に聞く

東京大学基金への寄付に関するアンケート（個人編）から

2009 年 7 月

劉　文君 [1)]
片山　英治 [2)]
小林　雅之 [3)]
服部　英明 [4)]

本ペーパーは、国立大学法人東京大学と野村證券株式会社による共同研究「わが国大学の財務基盤強化に関する共同研究」の一環として発刊するものである。

1) 東京大学大学総合研究センター特任研究員
2) 東京大学大学総合研究センター共同研究員 / 野村證券法人企画部主任研究員
3) 東京大学大学総合研究センター教授
4) 野村證券公益法人財務戦略部課長

はじめに

日本の大学では、安定的かつ永続的な発展という観点から、財務基盤の強化がますます重要な課題になりつつある。とりわけ、寄付金は施設設備の整備や大学の基金の充実に寄与し、さまざまな経営行動を可能とする財源として極めて重要である。実際に一部の大学では、寄付募集に積極的に取り組むようになってきている。こうした実態面での取組が進む一方で、日本の大学の寄付募集についての包括的調査はこれまでほとんどなされておらず、その基本的な実態さえも明らかになっていなかった。

そこで、われわれは日本の大学の寄付募集に対する取り組みの現状と課題を明らかにするとともに大学が募集活動に取り組む上での参考情報を提供することを目的として、全国の国公立・私立大学を対象に寄付募集に関するアンケート調査を実施した。その結果はディスカッションペーパーNo.02「わが国の大学の寄付募集の現状－全国大学アンケート結果」(2007 年 11 月）としてとりまとめられた。また、「高等教育機関のための寄付募集入門」(No.06)、「中国のトップ大学における寄付募集の現状」(No.07）等、諸外国の大学における寄付募集の考え方や取り組みについても紹介してきた。

しかし、「日本と諸外国では寄付文化が異なる」「寄付税制の拡充が図られないと寄付が集まらない」といった声が募金関係者の間で依然として根強いのも事実である。各大学と意見交換を通じて原因を探るうちに、日本の大学において寄付者が大学に対してどのような関心を抱いており、どのような動機で寄付をするのかが十分に把握されていないという課題が明らかになった。このような状況に鑑み、われわれは東京大学の渉外本部のご協力を得て、東京大学基金に寄付された個人と法人を対象にアンケート調査を実施した。本ペーパーは、個人に関する集計結果をとりまとめたものである。

大学への寄付の動機に関する調査は、公表ベースでは筆者らの知る限り日本で初めての試みである。巻末に添付した調査票を適宜活用し、各大学の寄付募集の取り組みが「ニードドリブン」から「ドナードリブン」へ転換を図る上での一助となれば幸いである。最後に、東京大学渉外本部の吉田洋一氏、吉田房代氏、小野寺達也氏には調査票の設計から寄付者への送付や回収、分析、解釈に至る一連のプロセスで大変お世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

2009 年 7 月

劉　文君
片山英治
小林雅之
服部英明

目次

序章　調査の目的と概要 …… 4
１．調査の目的及び調査の方法・時期・回収率 …… 4
２．回答者の属性 …… 4
１）寄付者の年齢別の分布 …… 4
２）寄付者の性別の分布 …… 5
３）寄付者に占める卒業生の割合 …… 6

第１章　寄付の動機 …… 7
１．東京大学基金に寄付する動機 …… 7
２．寄付者の属性から見た差異 …… 9
１）年齢別から見た差異 …… 9
２）男女別から見た差異 …… 10
３）卒業生と非卒業生別から見た差異 …… 11
３．寄付額別から見た寄付動機の差異 …… 11

第２章　寄付と母校に対する感謝 …… 13
１．東京大学に対して感謝する点 …… 13
２．寄付者の属性から見た差異 …… 15
１）年齢別から見た差異 …… 15
２）男女別から見た差異 …… 17
３）卒業生と非卒業生別から見た差異 …… 18

第３章　東京大学に対して支援する意思 …… 19
１．東京大学に対して支援したい点 …… 19
１）年齢別から見た差異 …… 20
２）男女別、卒業生と非卒業生別から見た差異 …… 22
３）寄付金額別から見た差異 …… 22
２．寄付を決める際の留意点 …… 23
１）寄付者全体の回答から見た傾向 …… 23
２）寄付者の属性から見た差異 …… 25
３）寄付金額別から見た差異 …… 26

第４章　同窓会と基金の募集事業に対する評価と要望 …… 28
１．東大関係者と同窓会からの働きかけと寄付動機 …… 28

２．同窓会と基金の募集事業に対する評価 29
１）同窓会の活動が活発に行われていると思う要因 30
２）同窓会の活動が活発に行われていないと思う要因 33
３．基金の募集事業に対する要望 35
４．寄付金額別から見た差異 37

第５章　東京大学の支援に対する意思 38
１．寄付回数の分布 38
２．寄付額の分布 39
３．他の大学や団体などへの寄付 40
４．寄付を通じて東京大学を支援する意思・条件及び寄付形態 41
１）意思と条件 41
２）寄付形態 43

第６章　東京大学基金全般に対する意見・要望 44

第７章　要約と結論 46
１．調査の目的と方法、回答者の属性 46
２．東京大学基金への寄付の動機 46
３．東京大学の同窓会と基金の募集事業に対する評価と要望 46
４．東京大学の支援に対する意志 47
５．東京大学基金全般に対する意見・要望 47

付
調査票 48

序章　調査の目的と概要

１．調査の目的及び調査の方法・時期・回収率

日本の大学では、安定的かつ永続的な発展という観点から、財務基盤の強化がますます重要な課題になりつつある。とりわけ、寄付金は施設設備の整備や大学の基金の充実に寄与し、さまざまな経営行動を可能とする財源として極めて重要である。実際に一部の大学では、寄付募集に積極的に取り組むようになってきている。こうした実態面での取組が進む一方で、日本の大学の寄付募集についての包括的調査はこれまでほとんどなされておらず、その基本的な実態さえも明らかになっていなかった。

そこで、われわれは日本の大学の寄付募集に対する取り組みの現状と課題を明らかにするとともに大学が募集活動に取り組む上での参考情報を提供することを目的として、全国の国公立・私立大学を対象に寄付募集に関するアンケート調査を実施した。その結果はディスカッションペーパーNo.02「わが国の大学の寄付募集の現状－全国大学アンケート結果」(2007 年 11 月）としてとりまとめられた。また、「高等教育機関のための寄付募集入門」(No.06)、「中国のトップ大学における寄付募集の現状」(No.07）等、諸外国の大学における寄付募集の考え方や取り組みについても紹介してきた。

しかし、「日本と諸外国では寄付文化が異なる」「寄付税制の拡充が図られないと寄付が集まらない」といった声が募金関係者の間で依然として根強いのも事実である。各大学と意見交換を通じて原因を探るうちに、日本の大学において寄付者が大学に対してどのような関心を抱いており、どのような動機で寄付をするのかが十分に把握されていないという課題が明らかになった。このような状況に鑑み、われわれは東京大学の渉外本部のご協力を得て、東京大学基金に寄付された個人と法人を対象にアンケート調査を実施した。本ペーパーは、寄付者個人に関する集計結果をとりまとめたものである。

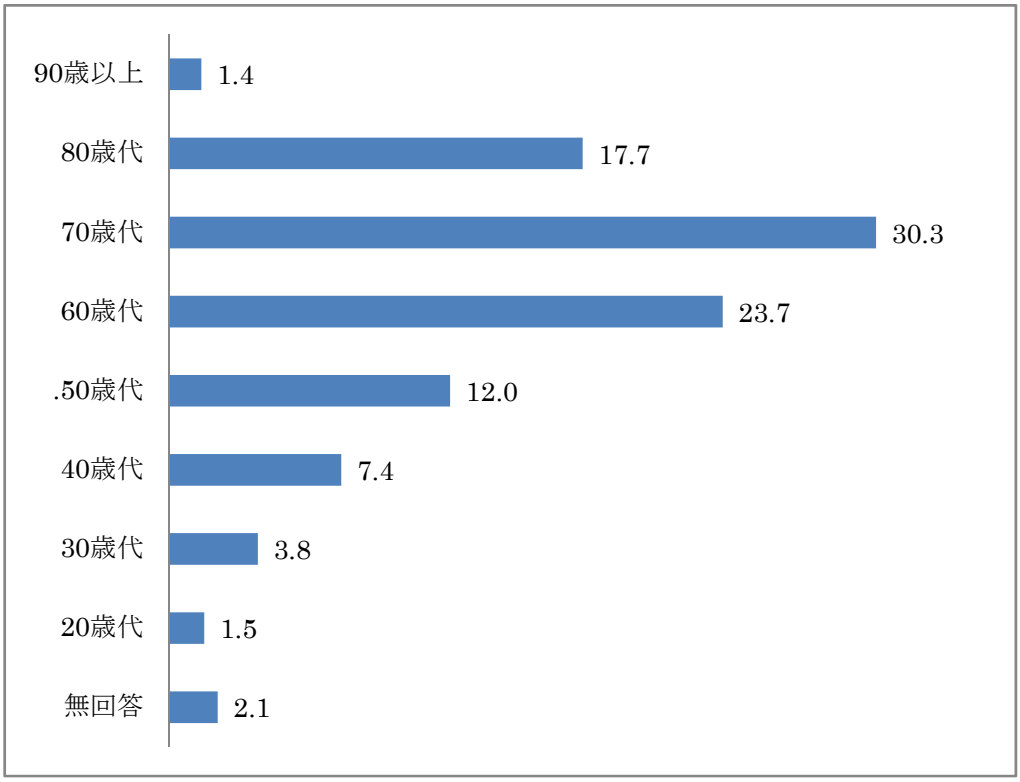
調査票は 2008 年 10 月に 4,104 の寄付者方に送付され、うち 1,569 名の寄付者の回答を得た、回答率は 38.2%である。

２．回答者の属性

１）寄付者の年齢別の分布

図表 0－1 に示すように、寄付者のうち「70 歳代」の割合がもっとも多く、30.3%である。次いで、「60 歳代」（23.7% ）、「80 歳代」（17.7%）、「50 歳代」（12.0% ）、「40 歳代」（7.4% ）、「30 歳代」（3.8% ）、無回答（2.1% ）、「20 歳代」（1.5 %）、「90 歳以上」（1.4%）の順となっている。

図表 0－1　寄付者の年齢別の分布（%）

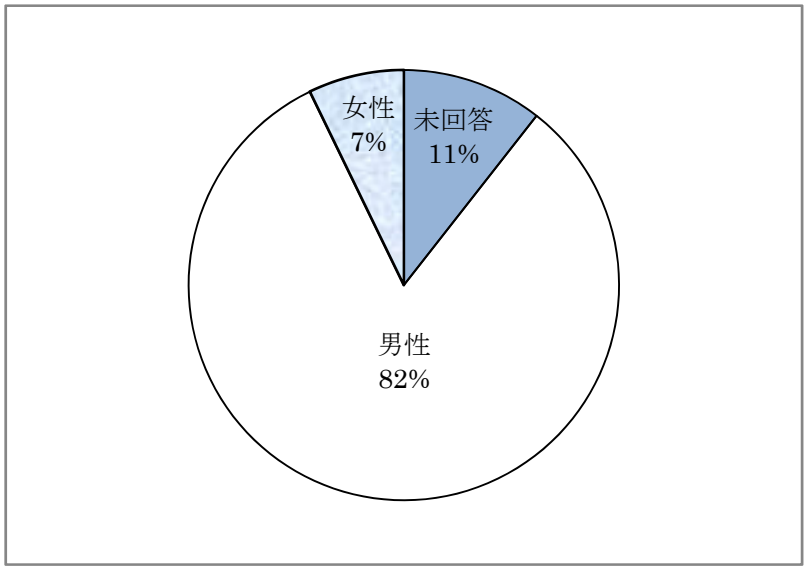


（N＝1569）

２）寄付者の性別の分布

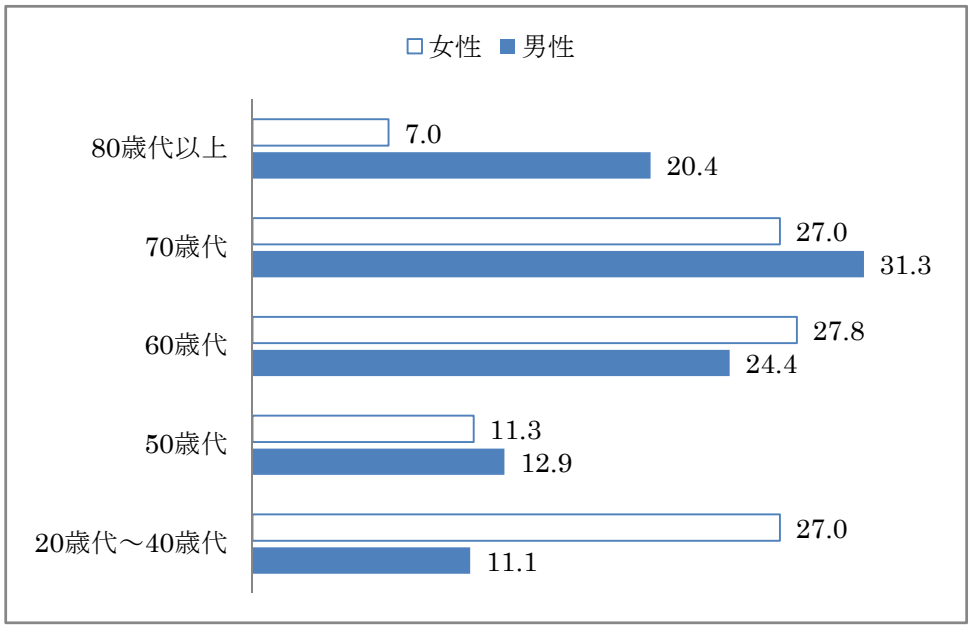
寄付者の性別の分布（図表 0－2）を見てみると、「男性」が圧倒的に多く、82%に達している。「女性」は 1 割未満の 7%である。

図表 0－2　寄付者の性別の分布



（N＝1569）

図表 0－3　年齢別から見た性別構成（%）



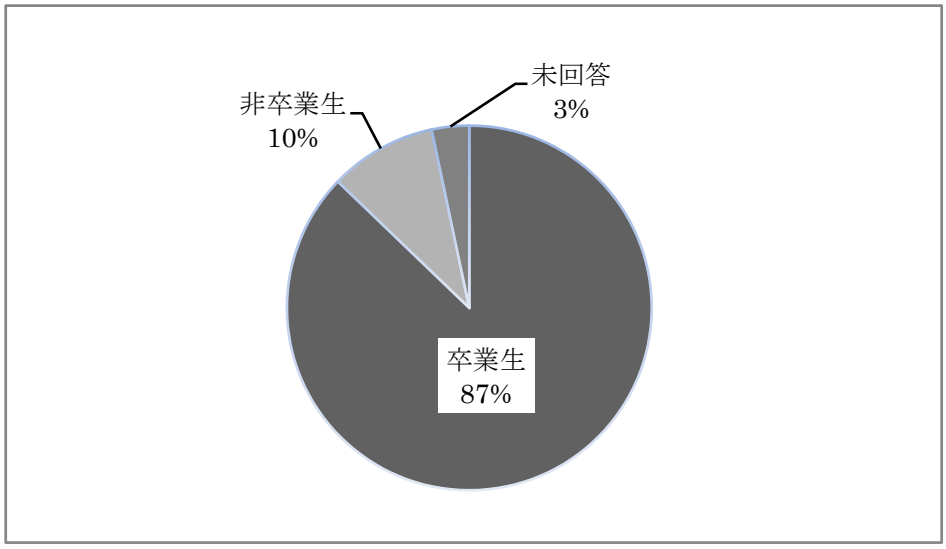
（N= 1427）

また、女性では 20~40 歳代が多く、男性では 80 歳代以上が多いのが目立っている（図表 0-3）。

３）寄付者に占める卒業生の割合

寄付者のうち卒業生である人の割合は（図表 0－4）、87%で、非卒業生は 10%である。寄付における卒業生の役割が大きいことが分かる。

図表 0－4　寄付者の卒業生の割合



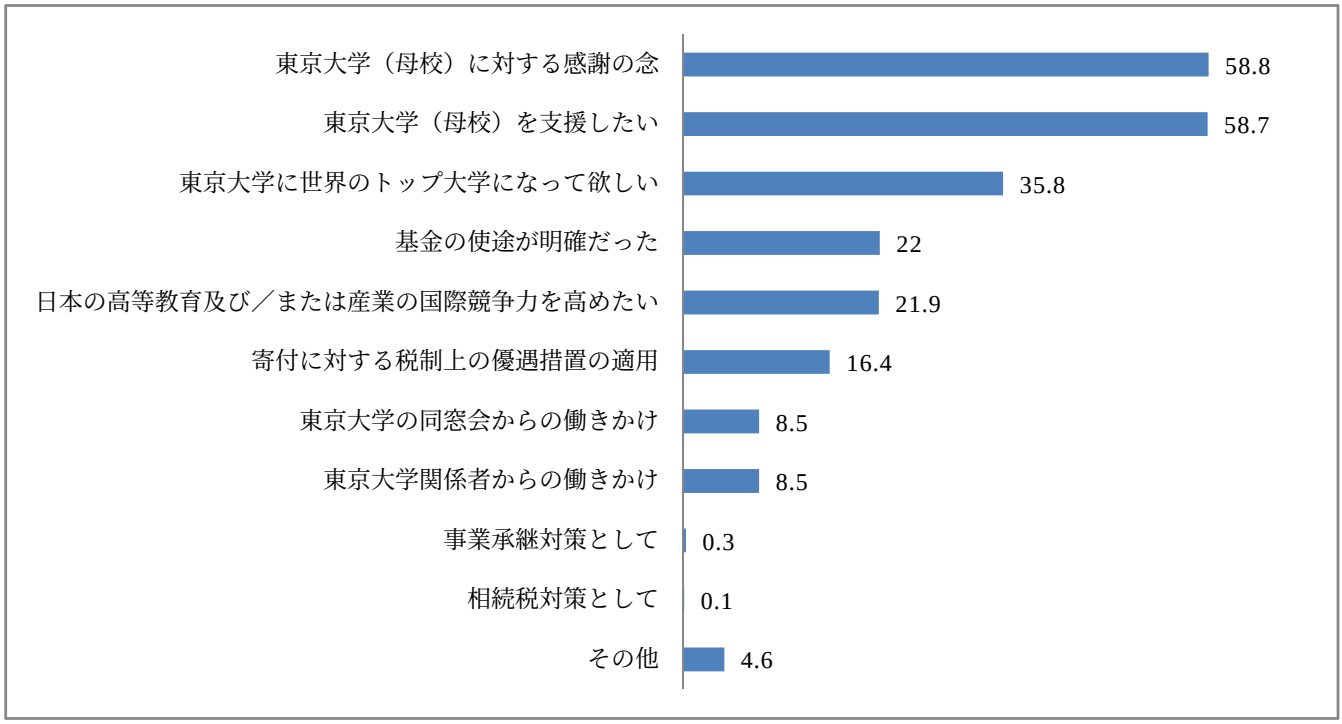
（N＝1569）

第１章　寄付の動機

１．東京大学基金に寄付する動機

東京大学基金に寄付する動機に関して、図表 1－1 に示すように、「東京大学（母校）に対する感謝の念」と「東京大学（母校）を支援したい」との回答の割合は圧倒的に多く、それぞれ、58.8%、58.7%となっている。また、「東京大学に世界のトップ大学になって欲しい」は 35.8%である。次いで、「基金の使途が明確だった」（22%）、「日本の高等教育及び／または産業の国際競争力を高めたい」（21.9%）、「寄付に対する税制上の優遇措置の適用」（16.4%）、「東京大学関係者からの働きかけ」（8.5%）、「東京大学の同窓会からの働きかけ」（8.5%）、「その他」（4.6%）の順である。そして、「事業承継対策として」（0.3%）、「相続税対策として」（0.1%）との回答の割合は一般に思われている結果とは逆に、非常に少ないことが明らかである。

図表 1－1　東京大学基金に寄付する動機（複数回答・%）



（N＝1569）

東京大学基金に寄付する動機についての自由回答をいくつかの項目に整理した。その結果は図表 1－2 に示している。

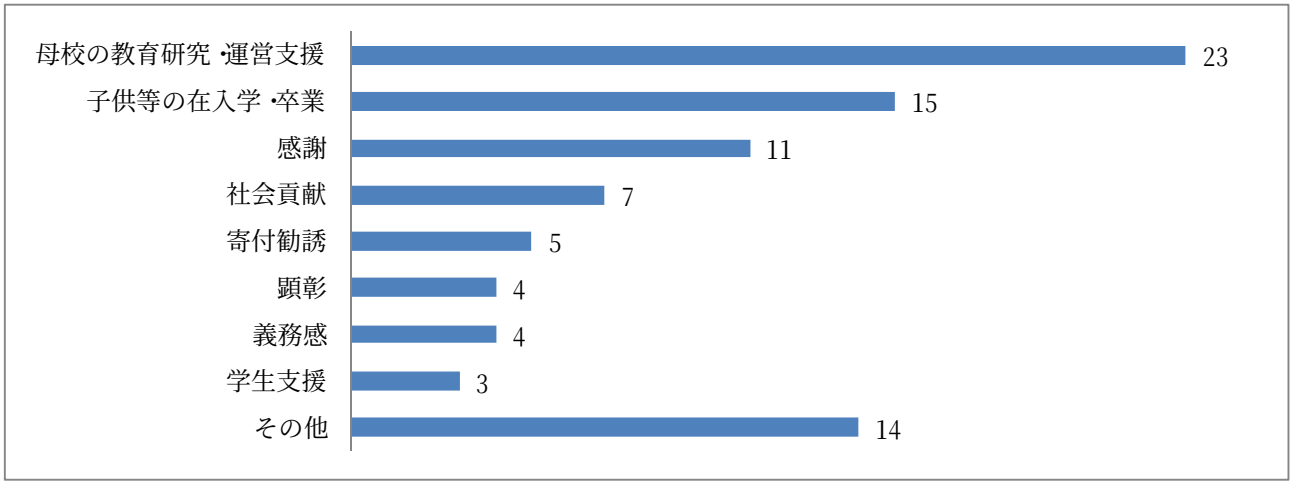
「母校の教育研究・運営支援」に関する回答はもっとも多く、23 件を寄せている。具体的には次のような記述が見られる[注]。

「ノーベル賞の未受賞分野、経済学賞、医学生理学賞、化学賞の部門で、同窓生から受賞者を出して頂きたい」、「混迷の時代にお世話になったことへの感謝の気持ちと第２回ホームカミングディに参加して独立法人として今後経営が厳しくなると聞き少しでもお役に立てばと思った」、「米国の一流大学のよ

[注] 以下の記述は、文体や送り仮名など読み取れる範囲で極力そのまま引用している。

うに、東大も『基金』の運用益に支えられるよう、基盤の拡充が必要と考え、ささやかながら、協力したい」、「何処の国でも、その国を代表する大学があり、その国の誇りとされる。日本では、戦後著しく大学が増えたが、その中にあって東大が、断じて名誉供に日本を代表する大学たれと願う」、「もっと国際的な交流のある大学になってほしい。(外国人の先生による講座・外国からの留学生受け入れ)」など。

図表 1－2　東京大学基金に寄付する動機（自由回答）



(N=86 件)

また、**「子供等の在入学・卒業」**に関する回答は 15 件である。たとえば、「子供を入学させて下さり感謝の気持ちで寄付した」、「女房が東京大学に入学したため」、「自分ばかりでなく家族の多くにとって（父、友人、弟二人、子供）東大は母校なので…」。

そして、「混迷の時代にお世話になったことへの感謝の気持ちと第２回ホームカミングディに参加して独立法人として今後経営が厳しくなると聞き少しでもお役に立てばと思った」、「急病時に付属病院にて、適切な処置をほとんどしていただき、命拾いしたため」、「東大本郷キャンパス内にある我が国近代医学制度創設に貢献した先人たち（相良知安他）の記念碑・胸像の保存・整備に尽力していただいたことへの感謝の気持ちからです」など**「感謝」**の気持で寄付したと回答したのは 11 件である。

「社会貢献」に関する回答は７件である。たとえば、「私たちの時代は学費が極めて安かったが、それは国が人材を育て将来国家・社会に役立つようにという願いから国費を投じているためであるとその昔に学外のある人から教えられたことがあります。その頃からいずれ社会人として独り立ちしたら、寄付のようなこともしなければと思い始めた気がします」、「社会に対する感謝の念を、縁にある、有意義な役割としている処を通じて」、「寄付文化を育むことが必要と考えるから」。

「寄付勧誘」との回答は５件である。たとえば、「130 周年募金活動に呼応し貧者の一灯を捧げた。医学部 150 周年にもささやかな寄付をさせていただいた。法学部（出身）にも寄付させていただいた。駒場友の会は一高出身ではないが終身会員とさせていただき正門改築募金にささやかな寄付をさせていただいたら総長名の御礼状いただき恐縮した」、「基金関係者からの働きです」。

また、「義務的、税金的感覚で」、「退職金の一部を還元すべきと感じた」、と**「義務感」**を寄付の動機になったと回答したのが４件、「記念プレートが安田講堂に掲示されるから」、「年を取ると名を後世に残

したいと思う。私の子孫は東大へ入ることはないかもしれないが、安田講堂にある小生の名を見て発奮してほしい」、と**「顕彰」**にかかわる回答が 4 件、「過去の関係のかたがたの努力が大いにあったと感謝する次代。その意味で、卒業生として、後から来る人をおおいに…。支援したいと思う」、「外国人学生に奨学金を出して多数招致したい」、と**「学生支援」**の回答は 3 件がある。

その他、「財務省への権限の集中を排除するためにも、非課税の寄付を増やすべきと信じる」、「会社の上司からの働きかけ」など**「その他」**に分類される回答が 14 件であった。

２．寄付者の属性から見た差異

１）年齢別から見た差異

年齢別での寄付動機にはいくつかの項目に統計的に有意な差が見られる（図表 1－3）。

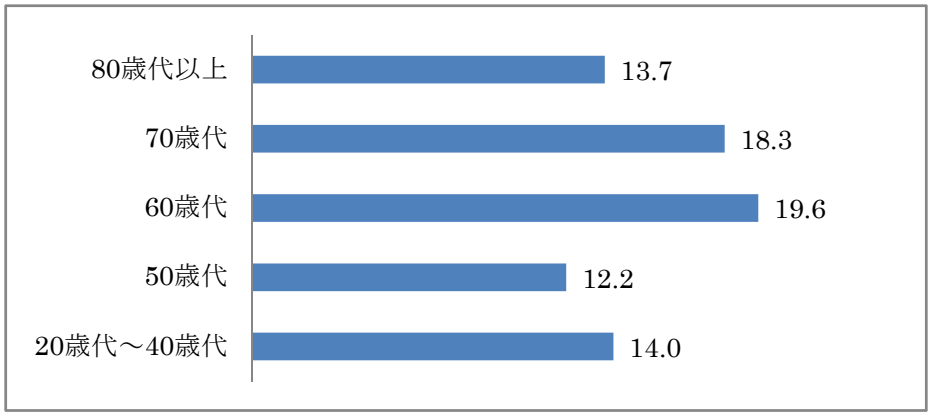
まず、「寄付に対する税制上の優遇措置の適用」について、図表 1－1 に示すように、回答者全体の中で肯定的な回答は 16.4%である。この数値を上回るのは、「60 歳代」（19.6%）と「70 歳代」（18.3%）である。全体の数値より低いのは「20 歳代～40 歳代」（14%）、「80 歳代以上」（13.7%）、「50 歳代」（12.2%）の順である。

また、「東京大学（母校）に対する感謝の念」について、肯定的回答の割合がもっとも高いのは 80 歳代（65.7%）である。次いで、「80 歳代以上」（61.0%）、「60 歳代」（58.6%）、「20 歳代～40 歳代」（56.5%）、「50 歳代」（44.4%）の順である。このように、年齢別にみれば、肯定的な割合が、「70 歳代」、「80 歳代以上」は比較的に高く、「50 歳代」は低いことが明らかである。

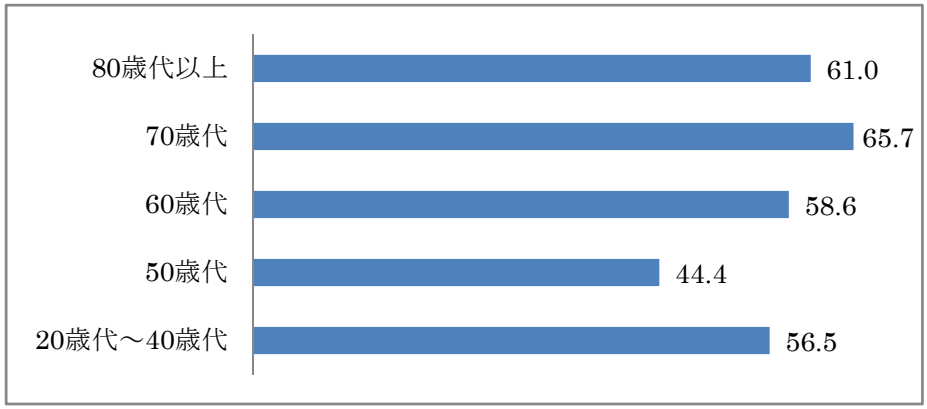
そして、「東京大学（母校）を支援したい」について、肯定的回答の割合がもっとも高いのは「20 歳代～40 歳代」（65.5 %）である、次いで、「60 歳代」（62.1%）、「70 歳代」（58.7%）、「50 歳代」（54.5%）、「80 歳代以上」（54.0%）の順である。

図表 1－3　年齢別から見た寄付動機の差異（%）

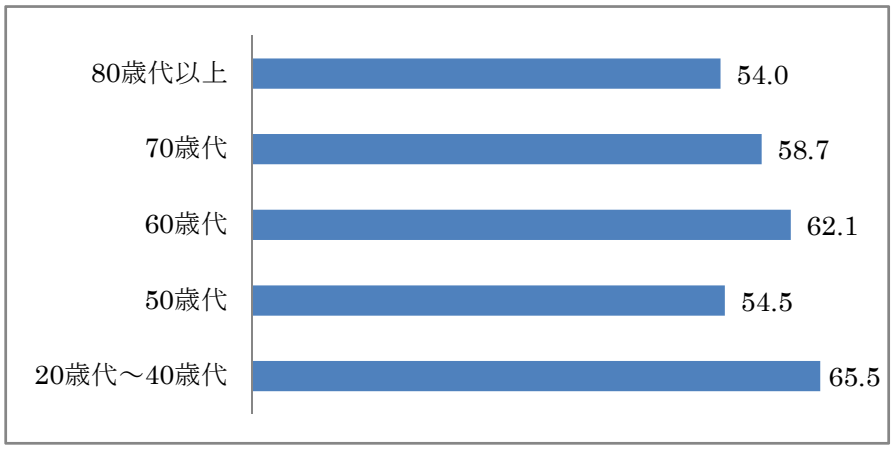
①寄付に対する税制上の優遇措置の適用



②東京大学（母校）に対する感謝の念



③東京大学（母校）を支援したい

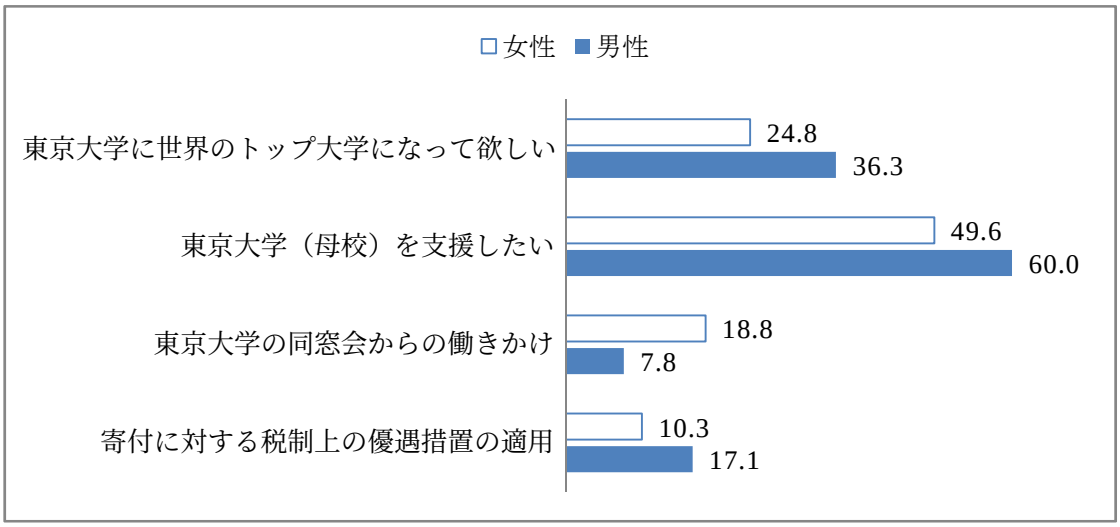


(N=1536)

２）男女別から見た差異

寄付動機についての回答には、男女別で統計的に有意な差がある項目が見られた。

図表 1－4　男女別から見た寄付動機の差異（%）



（N＝1435）

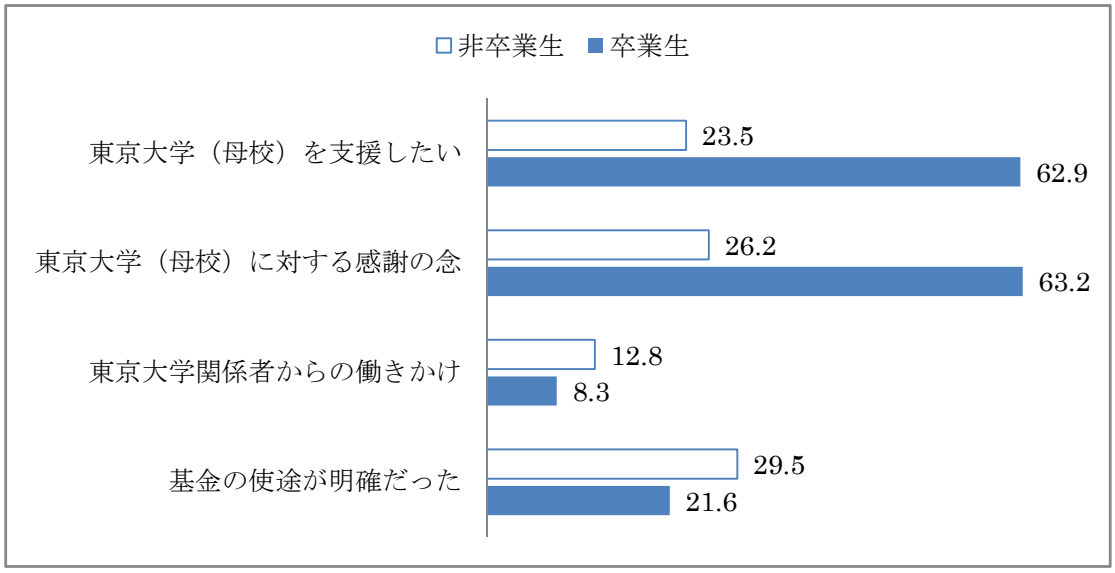
図表 1－3 に示すように、三つの項目で「男性」の割合が「女性」より高い。具体的には、「東京大学に世界のトップ大学になって欲しい」（「女性」24.8%、「男性」36.3%）、「東京大学（母校）を支援したい」（「女性」49.6%、「男性」60%）、「寄付に対する税制上の優遇措置の適用」（「女性」10.3%、「男性」17.1%）。これに対して、「東京大学の同窓会からの働きかけ」については、「女性」の回答の割合が（18.8%で）、「男性」（7.8%）より高いことが分かる。

３）卒業生と非卒業生別から見た差異

寄付動機について卒業生と非卒業生別で回答には、図表 1－5 に示すように、いくつかの項目で統計的差異が見られた。

「東京大学（母校）に対する感謝の念」、「東京大学（母校）を支援したい」の項目について、肯定の回答の割合は、「卒業生」でそれぞれ 63.2%と 62.9%で、「非卒業生」の 26.2%と 23.5%よりはるかに高いことが明らかである。これに対して、「基金の使途が明確だった」、「東京大学関係者からの働きかけ」の二つの項目に対する肯定の回答の割合は、「非卒業生」でそれぞれ 29.5%と 12.8%で、「卒業生」の 21.6%と 8.3%より高いことが分かる。

図表 1－5　卒業生と非卒業生別から見た寄付動機の差異（%）



（N＝1517）

３．寄付額別から見た寄付動機の差異

寄付額と寄付動機との関連性を見てみると、図表 1－6 に示す項目に統計的な差異が見られた。

①寄付に対する税制上の優遇措置の適用」についての「そうである」との回答の割合は、「30～99 万円」でもっとも高く 24.0%で、次いで、「10～29 万円」（18.9%）、「100 万円以上」（17.5%）、「5～9 万円」（14.3%）、「5 万円以下」（9.0%）の順である。全体として、「100 万円以上」をのぞけば、寄付金額が高いほど肯定的な回答の割合が高いことが分かる。

②「東京大学（母校）に対する感謝の念」について、「そうである」との回答の割合は、「100 万円以上」はもっとも高く、72.5%である。次いでは、「30～99 万円」（62.8%）、「10～29 万円」（58.4%）、「5～9

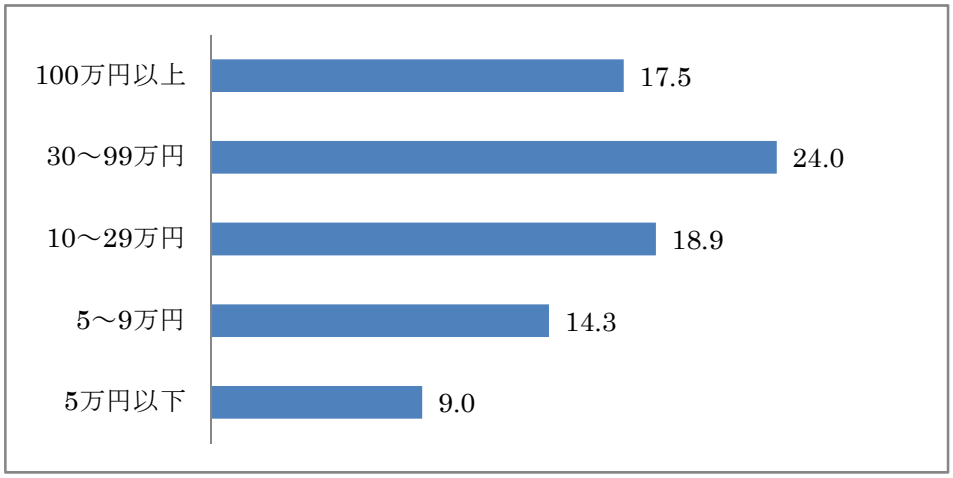
万円」(58.0%)、「5 万円以下」(55.4%) の順である。寄付金額と肯定的な回答の割合には正の相関関係がみられる。

③「東京大学に世界のトップ大学になって欲しい」について、「そうである」との回答の割合は、4 割台となっているのは「30～99 万円」(43.2%)「100 万円以上」(40%) の二つのグループである。そして、他の三つのグループに関しては、「10～29 万円」は 33.5%、「5～9 万円」は 33.4%、「5 万円以下」は 31.6%となっている。

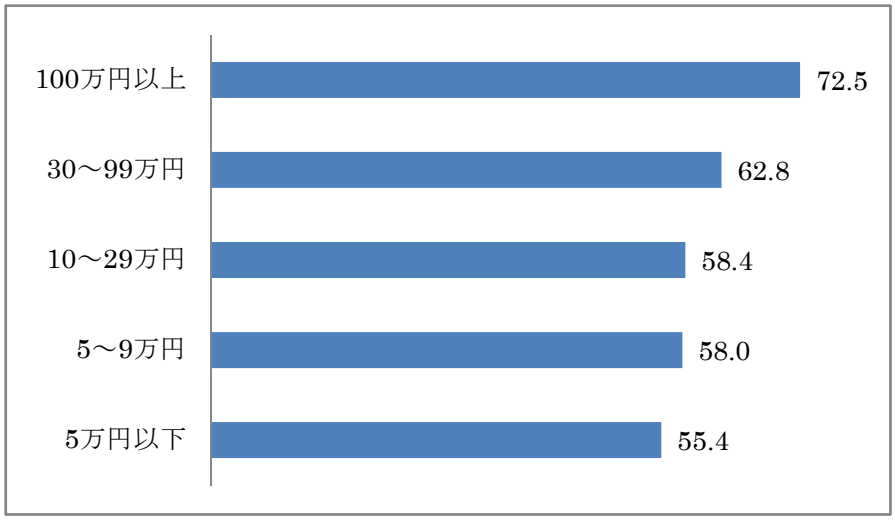
④「日本の高等教育及び／または産業の国際競争力を高めたい」について、「30～99 万円」、「10～29 万円」のグループでは、肯定的な回答の割合が他のグループより高いとの結果が見られた。

図表 1－6　寄付額別から見た寄付動機の差異（%）

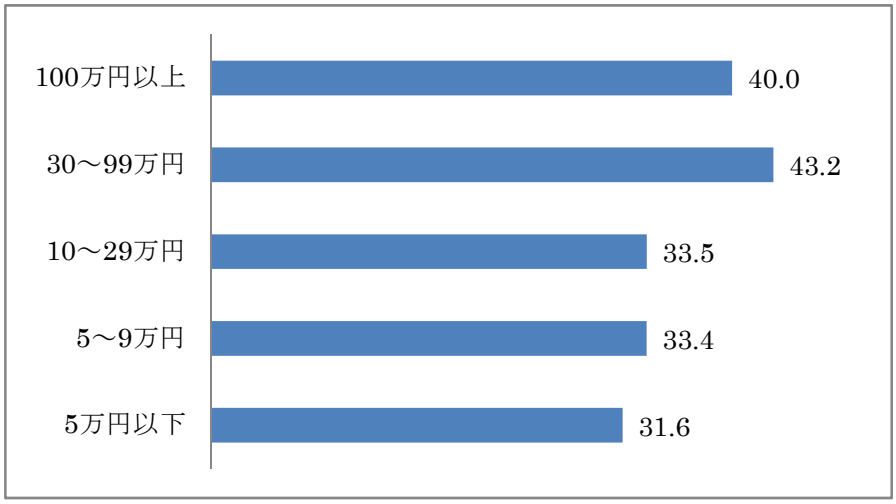
①寄付に対する税制上の優遇措置の適用



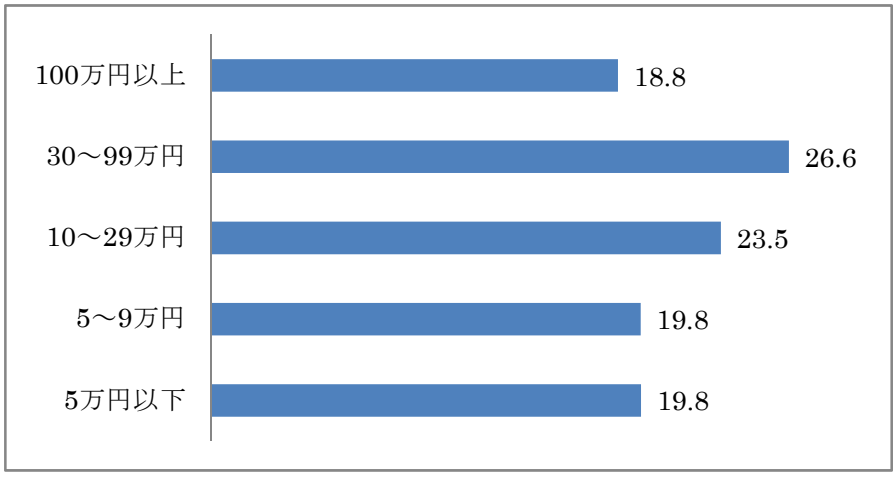
②東京大学（母校）に対する感謝の念



③東京大学に世界のトップ大学になって欲しい



④日本の高等教育及び／または産業の国際競争力を高めたい



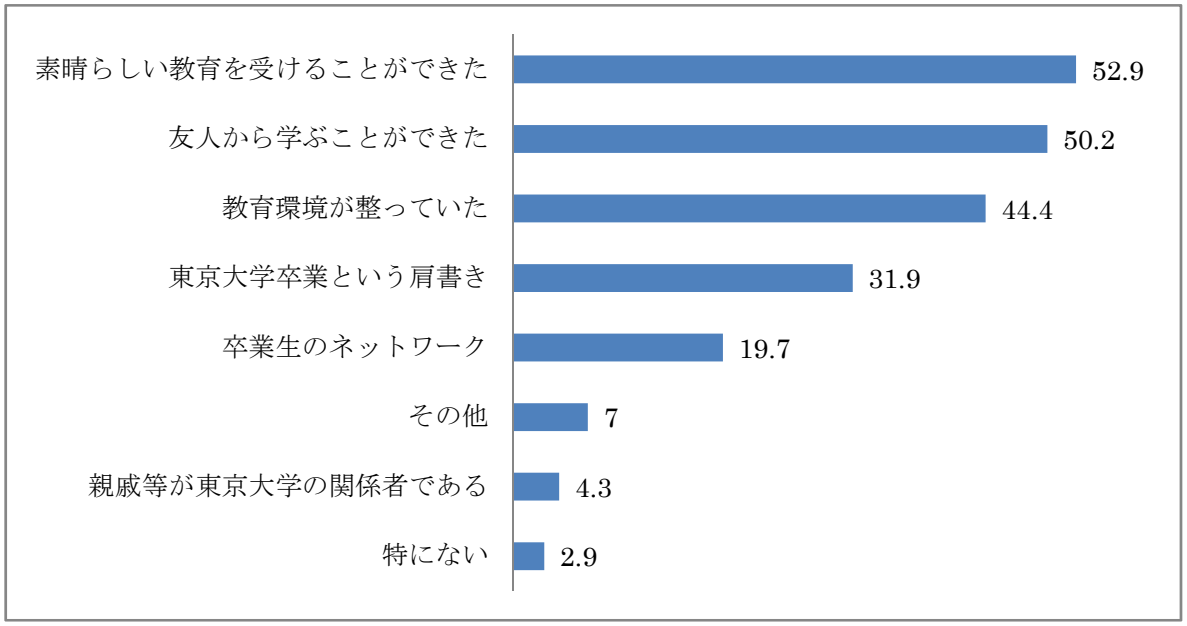
（N＝1495）

第２章　寄付と母校に対する感謝

１．東京大学に対して感謝する点

「東京大学に対してもっとも感謝されているのは、どのような点ですか（複数回答可）」という設問に対して、「素晴らしい教育を受けることができた」との回答の割合がもっとも高く、52.9%である。次いで、「友人から学ぶことができた」（50.2%）、「教育環境が整っていた」（44.4%）、「東京大学卒業という肩書き」（31.9%）、「卒業生のネットワーク」（19.7%）、「その他」（7%）、「親戚等が東京大学の関係者である」（4.3%）、「特にない」（2.9%）の順である（図表２－1）。

図表 2－1　東京大学に対して感謝する点（%）



(N=1569)

「東京大学に対して感謝する点」に関する自由回答の傾向を分析し、まとめた結果は図表 2－2 に示している。

「教育、研究」に関する回答はもっとも多く、68 件である。たとえば、「素晴らしい教育をして下さっている点」、「素晴らしい教授に接することが出来た」、「素晴らしい指導者に出会えたこと」、「最高学科で、勉学出来たこと、教授、学友に人を得たこと。卒業生であることの自信プライドも長い人生で『正直』を歩むことが出来たこと」、「十分に研究・教育活動をすることが出来た」、「東大の教育は、八十路の現在に至るまで、影に陽に、私の人生を導いてくれている」、「日本の学問、高等教育をリードしていること」があげられる

続いて、**「経済援助」**に関する回答は 20 件である。たとえば、「授業料免除、４年間学寮でお世話になった(生活費、通学のフットワーク）良き友」、「片田舎から上京し、不備だらけの私に、一時期奨学金まで、世話して下さり、戦後の混乱期を無事に過ごすことが出来たこと」、「教養学部三鷹寮での２年間の寮生活を通して友人に恵まれ生活基盤を確保できた事」、「北朝鮮からの引き上げ、貧乏学生は、授業料の免除（4 年間全額）奨学金などの援助があって、大学教育を受けることが出来た。東京大学に入れなかったら、大学教育を断念せざるをえなかった。今でも、私のような学生がいると思う」、「育英奨学金をはじめ、各種の援助を受けて今日の自分がある」。

また、**「友人・ネットワーク」**に関する回答は 19 件である。次のような例があげられる。「良き師、良き友に恵まれたこと」、「真っ直ぐに、堂々と生きている先輩・同輩・後輩がいること」、「多くの同窓生と親しくなり、お互いに励まし合うことが出来た」、「さまざまな分野で活動されている先輩・後輩と接点を持つことが出来ること」。

そして、**「卒業生・在学・在職」**である、と回答したのは 13 件がある。具体的に、「親族に東大出身者が多い」、「息子を育てていただいたこと」、「長年　東大に奉職出来たこと」、「助手、助教授、教授、名誉教授としての立場を戴き、教育と研究に、私自身の才能を存分に発揮することが、可能に成った事で

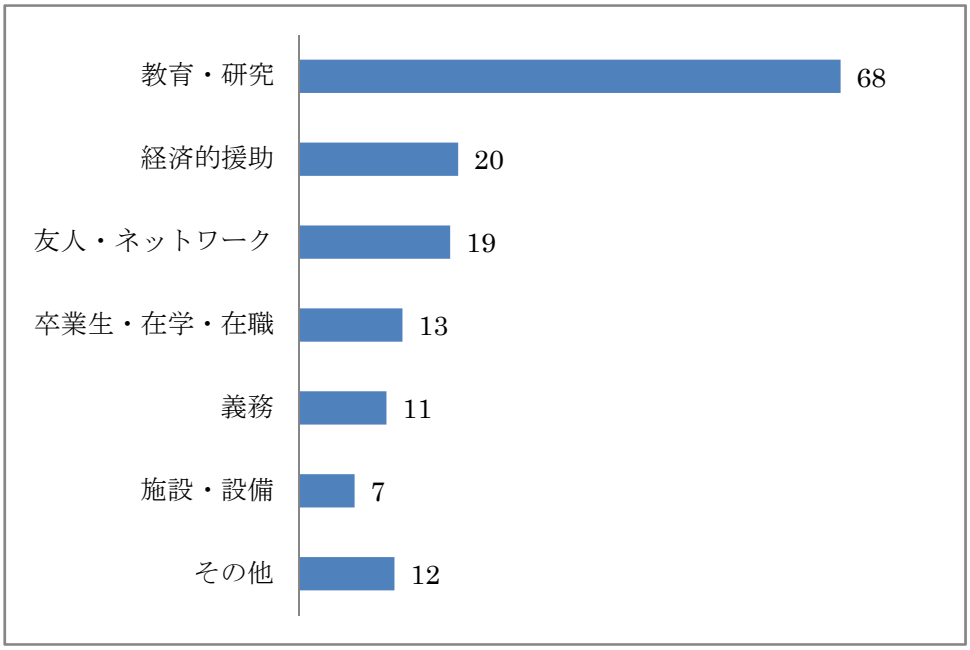
ある」。

「義務」とかかわる回答としては 11 件がある。たとえば、「当然の責務」、「人にはいわぬが心の中のほこり」、「この年（72 歳）になり、日本の今の教育の荒廃を見ると、なんとわれわれの時代は、良かったことかと考えると、しばしば後輩たちにエールを送りたい」、「国家の支援によって、大学まで進学出来たことに対して感謝している。その延長上に社会人として後進を支援する気持ちを抱いている」。

「施設・設備」に関する回答は 7 件がある。次のような例があげられる。「研究環境が整っていた」、「現在本郷の総合図書館を利用しています。在学生の邪魔にならない範囲でこれからも利用したい」などがある。

以上のどの傾向にあてはまらない**「その他」**の回答としては 12 件がある、たとえば、「小生 S23 年卒であるが、就職先は中小企業でしたが、当時弱 40 億円の新規事業にあたり、小生が東大卒ということが、銀行融資を保たれた要因であったこと」、「私が卒業した時は就職氷河期で修士に３年、さらに１年、研究生として在学し、26 歳になっていたので就職はとても難しく小さい出版社、広告会社を４つ転々としました。その折学歴は役に立ちました。私はとてもそう見えなかったらしく『卒業証書を持ってこい』と言われたことがありましたが」

図表 2－2　東京大学に対して感謝する点（自由回答）



(N=150 件)

２．寄付者の属性から見た差異

１）年齢別から見た差異

上述の「東京大学に対してもっとも感謝されている点」についての回答には、年齢別で統計的に有意な差異がみられる。これは図表 2－3 に示している。すなわち、

①「素晴らしい教育を受けることができた」について、「そうである」と回答した割合は、「20 歳代～40 歳代」でもっとも高く、59.0%である。次いで、「80 歳代以上」(55.3%)、「70 歳代」(54.7%)、「60

歳代」（48.7%）、「50 歳代」（48.1%）の順である。

②「友人から学ぶことができた」について、「そうである」と回答した割合は、50%以上に達しているのは「60 歳代」（57.3%）、「70 歳代」（55.2%）、「20 歳代～40 歳代」（53.0%）である。その他のグループは、「50 歳代」（43.9%）と「80 歳代以上」（37.0%）である。

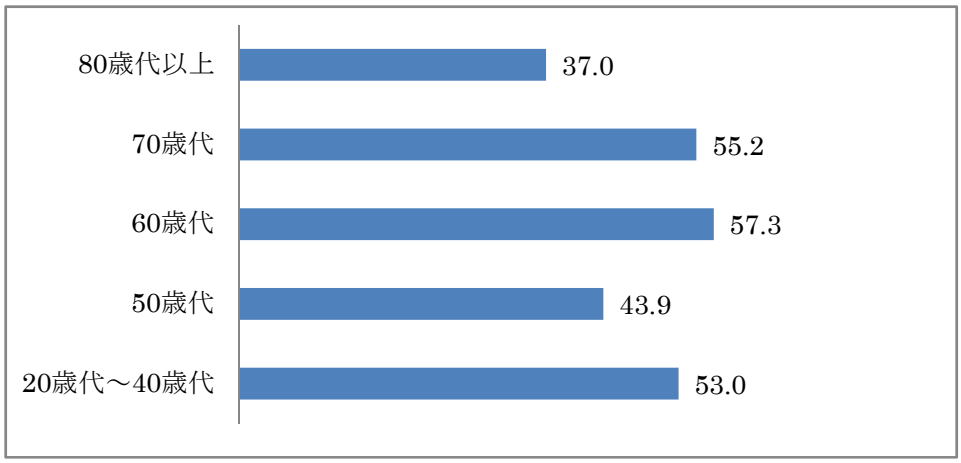
③「東京大学卒業という肩書き」について、「そうである」との回答の割合は、「60 歳代」とその以上の歳代は 3 割を超えている。具体的には、「60 歳代」（34.7%）、「70 歳代」（34.1%）、「80 歳代以上」（32.3%）である。その他のグループは肯定的な回答は 2 割にとどまっている、すなわち、「20 歳代～40 歳代」は 28.5%で「「50 歳代」は 25.4%である。

④「卒業生のネットワーク」について、「そうである」との回答の割合は、2 割を超えているのは、60 歳代以下の世代である、具体的には、「60 歳代」は 25.0%）、「50 歳代」（22.8%）、「20 歳代～40 歳代」（22.5%）である。

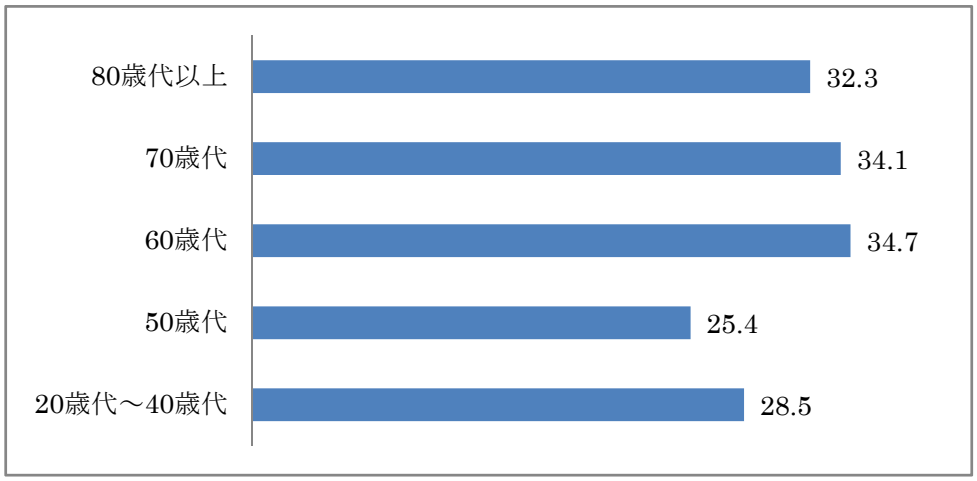
図表 2－3　年齢別から見た東京大学に対して感謝する点（%）

①　素晴らしい教育を受けることができた

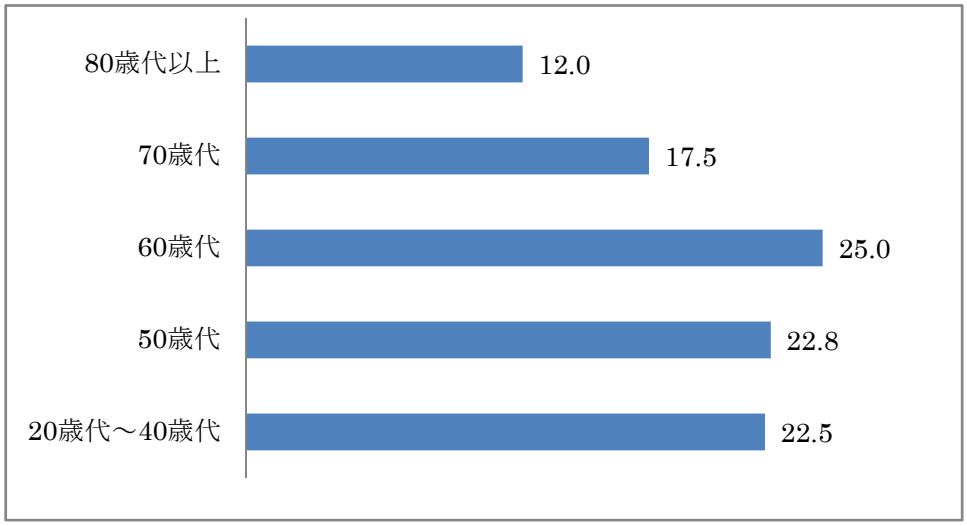
②　友人から学ぶことができた



③東京大学卒業という肩書き



④卒業生のネットワーク



(N=1536)

２）男女別から見た差異

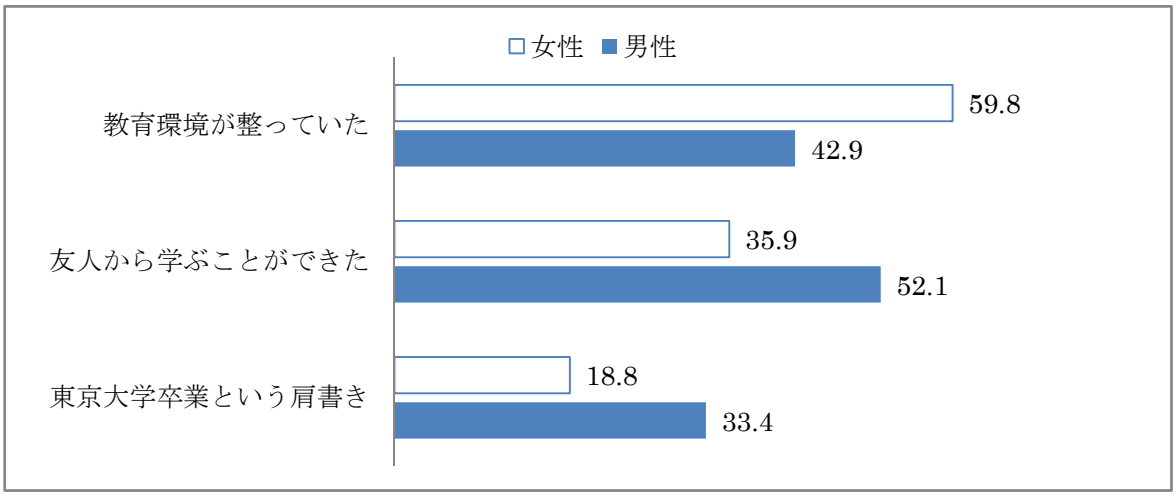
「東京大学に対してもっとも感謝されている点」についての回答について、次の三つの項目では男女別にみて統計的に有意な差異が見られる（図表 2－4）。

①「教育環境が整っていた」について、「そうである」との回答の割合が、「女性」では 59.8%で、「男性」の 42.9%より高い。

②「友人から学ぶことができた」について、肯定的な回答の割合が、「女性」では 35.9%である。これに対して「男性」は 52.1%であった。

③「東京大学卒業という肩書き」について、「そうである」との回答の割合が、「女性」では 18.8%、「男性」の方が 33.4%と、男性の方が高いことが分かる。

図表 2－4　男女別から見た東京大学に対して感謝する点（%）



(N=1435)

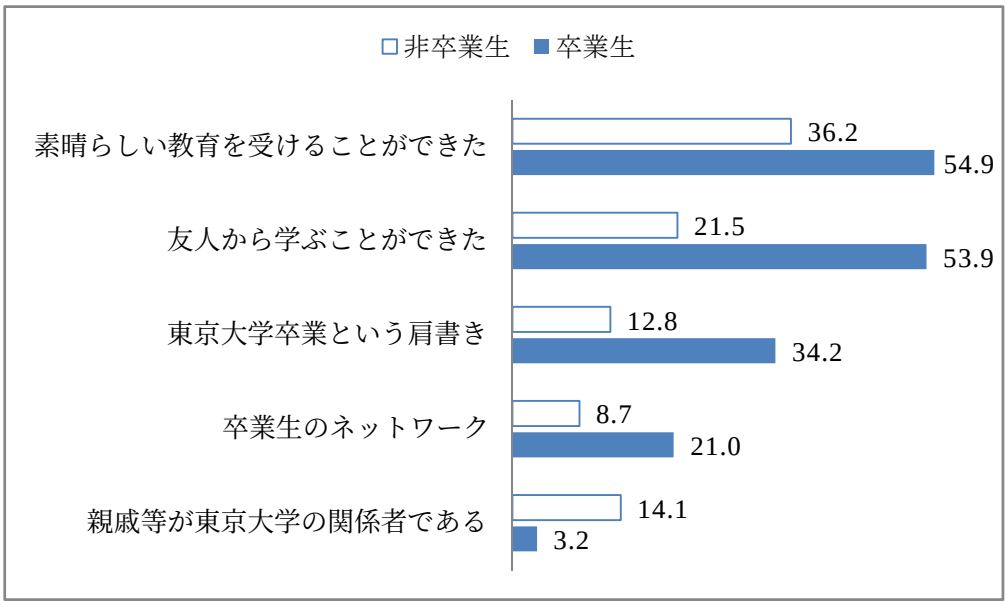
３）卒業生と非卒業生別から見た差異

卒業生と非卒業生別の「東京大学に対してもっとも感謝されている点」の差異を見てみると、五つの項目で統計的な有意な差が見られた（図表 2－5）。

①「素晴らしい教育を受けることができた」、②「友人から学ぶことができた」、③「東京大学卒業という肩書き」、④「卒業生のネットワーク」の四つの項目について、「そうである」と回答した割合は、「卒業生」の方が「非卒業生」より圧倒的に高い。

⑤「親戚等が東京大学の関係者である」の項目について、肯定的な回答は、「卒業生」の 3.2%より、「非卒業生」の方が高く、14.1%である。

図表 2－5　卒業生と非卒業生別から見た東京大学に対して感謝する点（%）



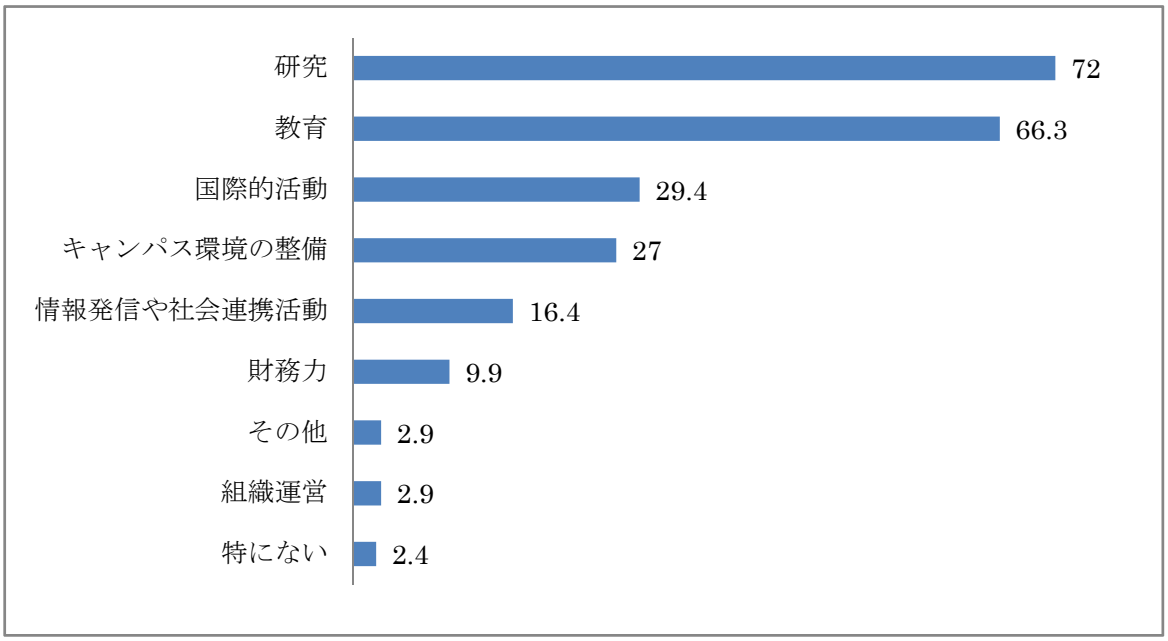
(N=1517)

第３章　東京大学に対して支援する意思

１．東京大学に対して支援したい点

「東京大学のどのような点を支援したいとお考えになりましたか（複数回答可）」という設問に対して、「そうてある」との回答の割合は、もっとも多いのは「研究」であり、72%に達している。「教育」は二番目の 66.3%である。次いで、「国際的活動」（29.4%）、「キャンパス環境の整備」、（27%）、「情報発信や社会連携活動」（16.4%）、「財政力」（9.9%）、「その他」（2.9%）、組織運営（2.9%）、「特にない」（2.4%）の順である（図表 3－1）。「教育」と「研究」の回答の割合が他の項目のそれより圧倒的に多いことは明らかである。

図表 3－1　東京大学に対して支援したい点（複数回答可・%）



(N=1569)

「東京大学のどのような点を支援したいとお考えになりましたか」に対する自由回答をまとめた結果を図表 3－2 に示している。まず、**「教育・研究・運営」**に関する回答がもっとも多く、32 件がある。次のような例があげられる。「ノーベル賞受賞者をアメリカ（USA）並みにする）、「新しい分野の研究開発に貢献して欲しい」、「教育と研究とイノベーションへの三位一体推進」、「教育も研究ももっとお金を使って世界の一流を集めるべきである」、「独立行政法人として自らの力で各学力を強化したい」、「私学と比較して、その生い立ちから国立大は、財務的関心が薄く、従って又、寄付を募ったり、PR したりするのが不得手である。独立法人化時代を迎え、肩書き手法を学んでいただきたい」、「ハーバードが巨萬の富を原資とした運用益を大学運営に役立てていると聞き、我々も母校に微力なりとも協力し、母校が更にその名を高めるのに役立って欲しいと願いました」。

「学生・留学生支援」に関して 11 件がある。たとえば、「自分自身奨学金で大学を卒業できたので、資金面で厳しい学生の援助ができればと思いました」、「苦学生の生活援助」、「外国人留学生支援」、「学

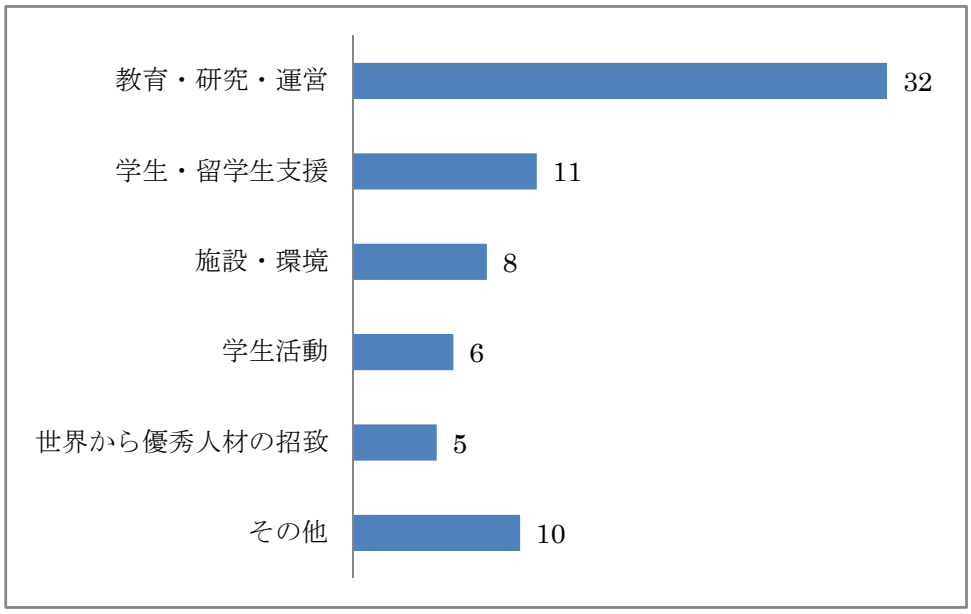
生や留学生が学内で安価に生活出来る環境の整備」、「経済的にめぐまれない学生への支援」。

「施設・環境」関する回答は８件がある。具体的には、「運動部の強化（施設の充実など)」、「建築物は、老朽化しているように思いますが、耐震性は大丈夫なのでしょうか？」、「クラブの老朽化した建物（道路など）の支援にもなせるようにしてほしい」、「１.キャンパス建物の掃除が行き届いていたが、いつも美しいキャンパスであってほしい。２.図書館が貧弱。本が少なくたこ足状態。これを何とかしてほしい」。

「学生活動」にかかわる回答は６件がある。たとえば、「同窓ネットワークの充実」、「運動会、特に硬式野球部の活動」、「同窓会の強化発展が若い人たちにも力になると思う」などの回答がある。

以上のカテゴリにあてはまらない「その他」として、「地域に貢献出来る大学（緑を多くする)」、「危機管理」などの回答がある。

図表３－２　東京大学に対して支援したい点（複数回答可）



（N=72 件 ）

１）年齢別から見た差異

続いて、「東京大学のどのような点を支援したいとお考えになりましたか」という設問（選択項目）に関して年齢別、男女別、卒業生と非卒業生による回答の差異を見てみる。

まず、「東京大学に対して支援したい点」について年齢別によって統計的な有意な差は図３－３に示す三つの項目に見られる。

①「財務力」をあげた割合がもっとも高いのは「20 歳代～40 歳代」で、13.5％である。次いで、「60 歳代」（11.0％)、「70 歳代」（10.9％)、「50 歳代」（7.9％)、「80 歳代」（5.7％）の順である。

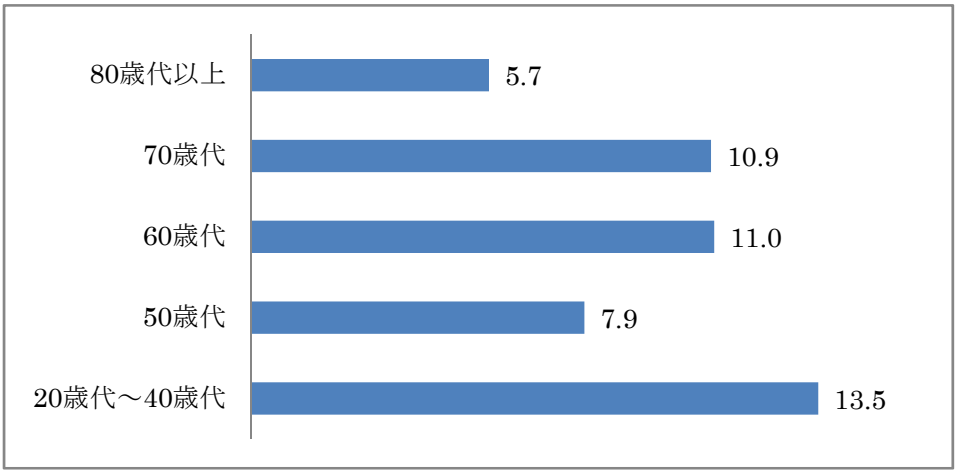
②キャンパス環境の整備」について、「そうと思う」との回答の割合が、「50 歳代」でもっとも多く、38.6％である。次いで、「20 歳代～40 歳代」（32.0％)、「60 歳代」（30.9％)、「70 歳代」（22.1％)、「80 歳代以上」（21.0％）の順である。総じて、「70 歳代」とその上の歳代はその割合は低いことが分かる。

③「情報発信や社会連携活動」について、「60 歳代」で最も多く、23.9％である。次いで、「50 歳代」

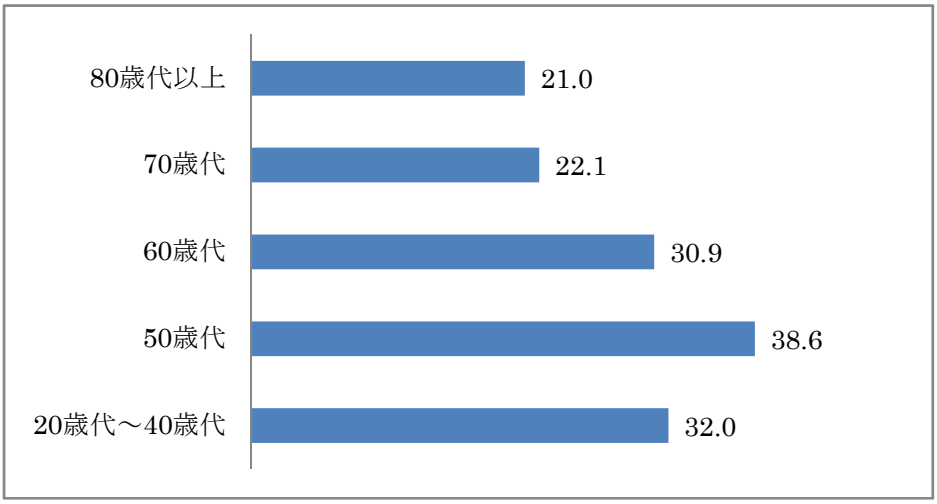
は 18.0%、「20 歳代～40 歳代は（17.0%）、「70 歳代」（13.1%）、「80 歳代以上」（11.7%）の順である。

図表 3－3　「東京大学に対して支援したい点」の世代間の差異（%）

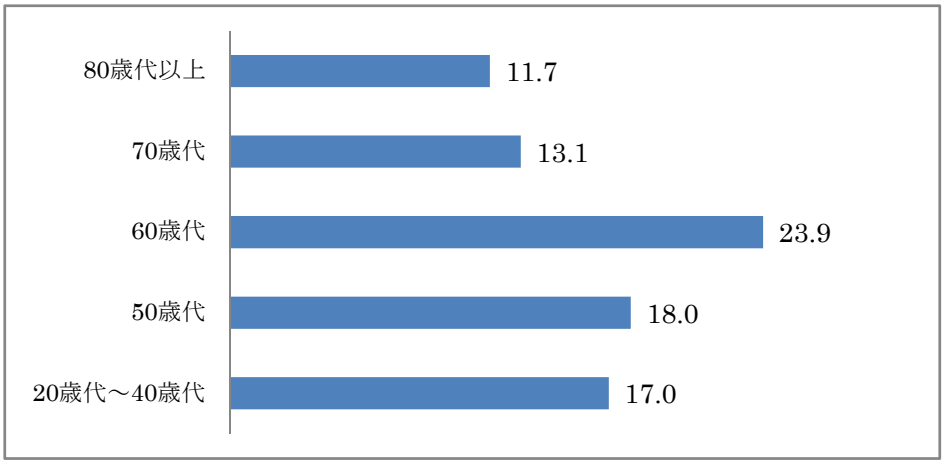
①財務力



②キャンパス環境の整備



③情報発信や社会連携活動



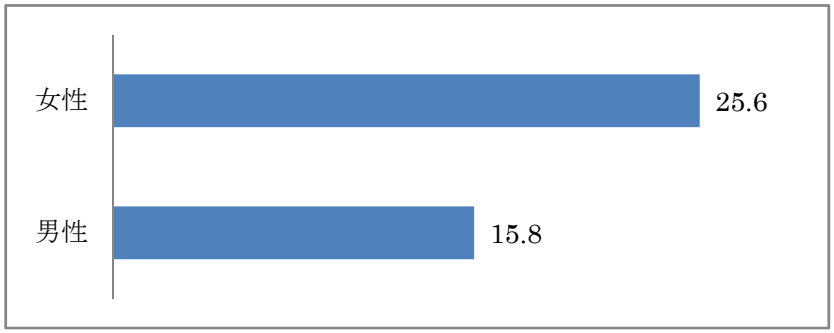
(N=1536)

２）男女別、卒業生と非卒業生別から見た差異

「東京大学のどのような点を支援したいとお考えになりましたか（複数回答可）」という設問の多数の項目に関しては、男女別、卒業生と非卒業生の間に統計的に有意な差が見られない。

「情報発信や社会連携活動」については、男女間で差異が見られた（図表 3－4）、「女性」では 25.6%、「男性」では 15.8%、と「女性」の方がこの点をあげた割合が高いことが分かる。

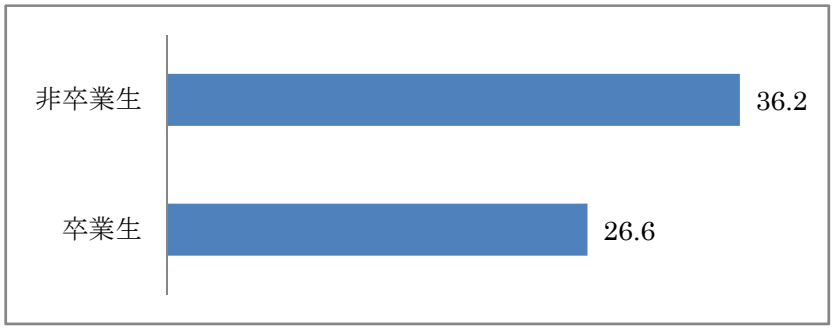
図表 3－4　「東京大学に対して支援したい点」の男女別の差異（%）
（情報発信や社会連携活動）



(N=1435)

また、「キャンパス環境の整備」についての回答には、図表 3－5 に示すように、「卒業生と非卒業生の差異が見られる、この項目について、「非卒業生」は 36.2%で、卒業生の 26.6%を上まわっている。

図表 3－5　「東京大学に対して支援したい点」の卒業生と非卒業生の間の差異（%）
（キャンパス環境の整備）



(N=1517)

３）寄付金額別から見た差異

寄付金額別から見た「東京大学に対して支援したい点」に対する回答の差異は、図表 3－6 に示すように二つの項目で見られた。

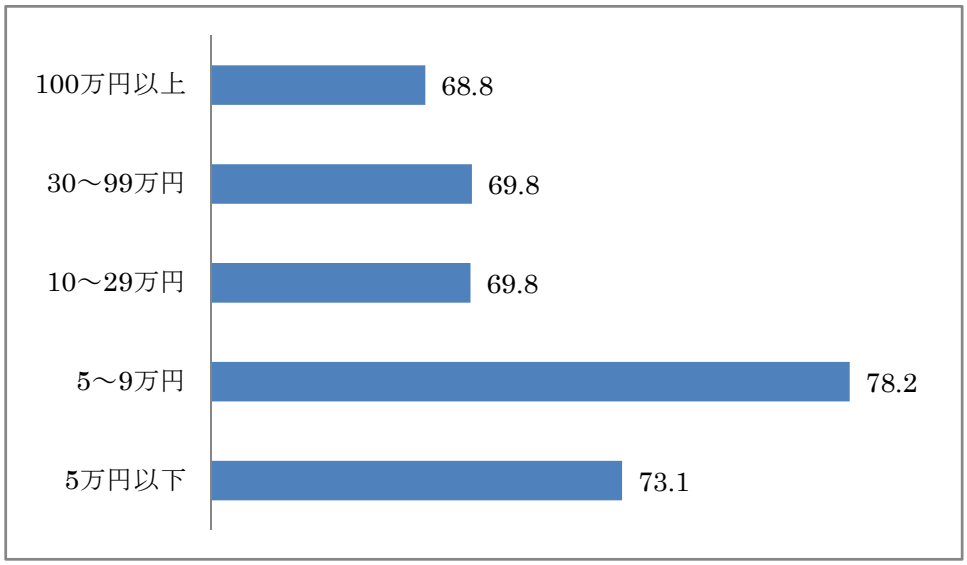
まず、「研究」について、「5～9 万円」はもっとも多く、78.2%、次いで、「5 万円以下」（73.1%）、「10～29 万円」（69.8%）、「30～99 万円」（69.8%）、「100 万円以上」（68.8%）の順である。

また、「財政力」について、「100 万円以上」の割合がもっとも高いく、17.5%、次いで、「30～99 万円」

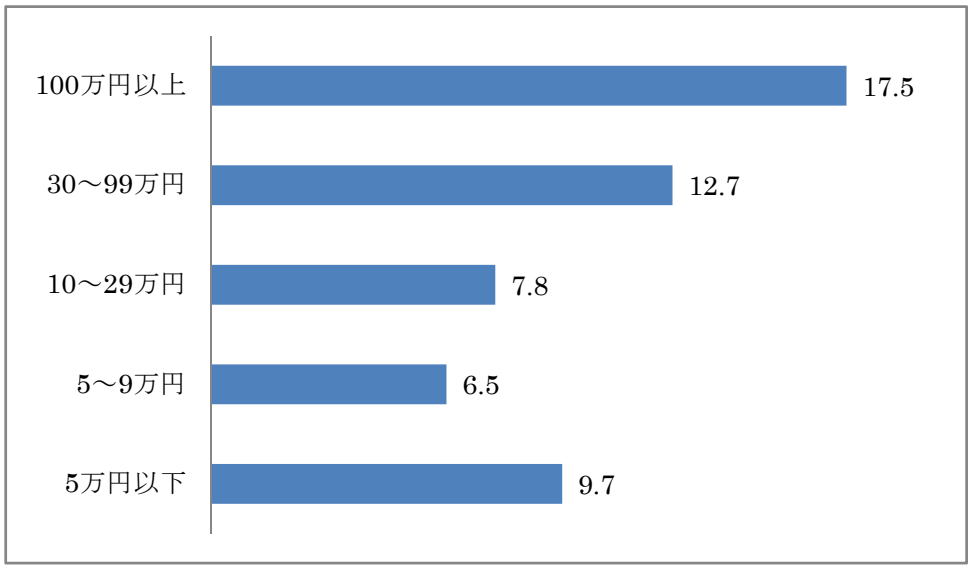
（12.7%）、「5 万円以下」（9.7%）、「10～29 万円」（7.8%）、「5～9 万円」（6.5%）の順である。

図表 3－6　「東京大学に対して支援したい点」の寄付金額別にみた差異（%）

①研究



②財務力



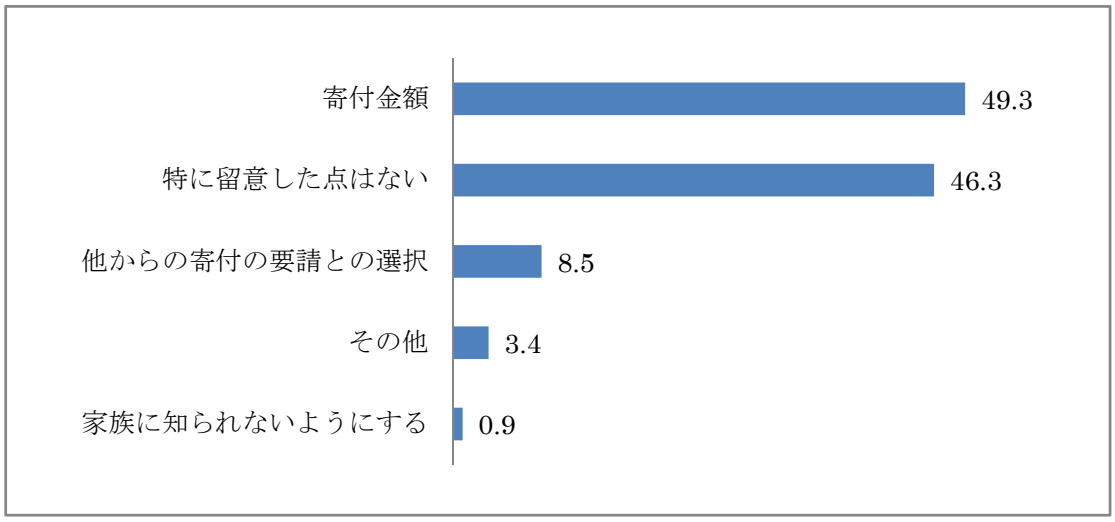
（N=1495）

２．寄付を決める際の留意点

１）寄付者全体の回答から見た傾向

「東京大学基金への寄付を決められる際に留意されたのはどのような点ですか（複数回答可）」についての寄付者全体の回答の分布を見てみると（図表 3－7）、「寄付金額」がもっとも多く、49.3%、次いで、「特に留意した点はない」（46.3%）、「他からの寄付の要請との選択」（8.5%）、「その他」（3.4%）、「家族に知られないようにする」（0.9%）の順である。

図表 3－7　寄付を決める際の留意点（%）



(N=1569)

「東京大学基金への寄付を決められる際に留意されたのはどのような点ですか」の問いに対する自由回答をいくつかの項目に分けてまとめた結果は、図表 3－8 に示している。

もっとも多い回答は**「経済力・金額」**である。次のような具体的な例がある。「現在の経済的能力（年金生活なので)」、「自分の現在の収入と生活費をおもんじっての額」、「生活費、日常の出費とのバランス」、「他の卒業生とのバランス」、「卒業期(年齢）ごとの寄付金額の実績、または、大学側でも希望額でも示して戴ければ応じやすい。(旧制高校ではこの方法が一般的だったと思う)」。

続いて、**「使途・基金趣旨」**に関する回答は 13 件である。例としては、次の回答があげられる、「教育研究の役に立てばよい」、「使途の特定」、「趣旨に賛同！是非達成して欲しいと思う」、「真に必要な使途があれば、それに見合う寄付を考えたいが、当初寄付要請があった法学部関係とは、要するに法学部で自由に使える金を大学基金に先立って必要とするもののようだった」、「寄付習俗の弱い日本、この点の開拓一主として PR、啓蒙でしょうか一が必須と考えます。併せて経理管理を怠りなく、スキャンダル発生は絶対避けてもらいたい」。

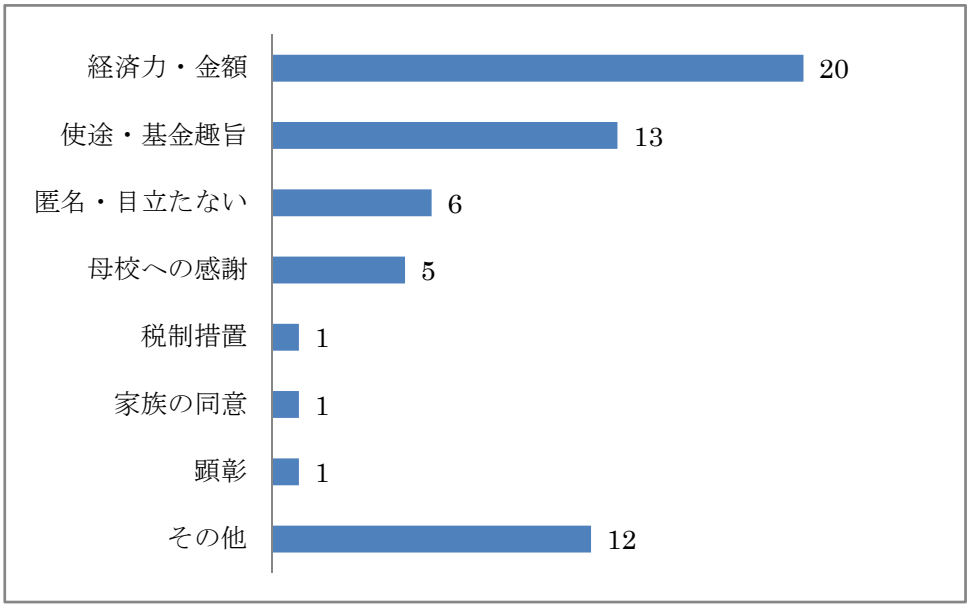
「匿名・目立たない」の意見の回答は 6 件、たとえば、「めだたないように」、「匿名でも良かったこと」、「匿名希望」、「氏名が発表されないようにすること」などの回答がある。

「母校への感謝」が 5 件ある。たとえば、「ギリギリの年金生活で少しのゆとりもない中、やはり東大での教育のお陰で今の自分が作られたので力を振り絞って寄付しました」、「父が卒業生の為お礼のつもりです」、「息子の合格そして入学、安田講堂に銘板を掲示」。

また、「安田講堂に自分のネームプレートを掲げてもらえることと寄付による貢献会員として認定プレートをいただけることに喜びを感じて寄付を決意した」（顕彰)、**「家族の同意」**、**「税制上の措置」**の回答がそれぞれ 1 件があった。

以上のカテゴリに当てはまらない**「その他」**として、「自分の行動として誇りを持ちたかった」、「業務上離れることが出来ない」、「子供の教育への期待を込めて」などの 12 件である。

図表 3－8　寄付を決める際の留意点（自由回答）



（N=59 件）

２）寄付者の属性から見た差異

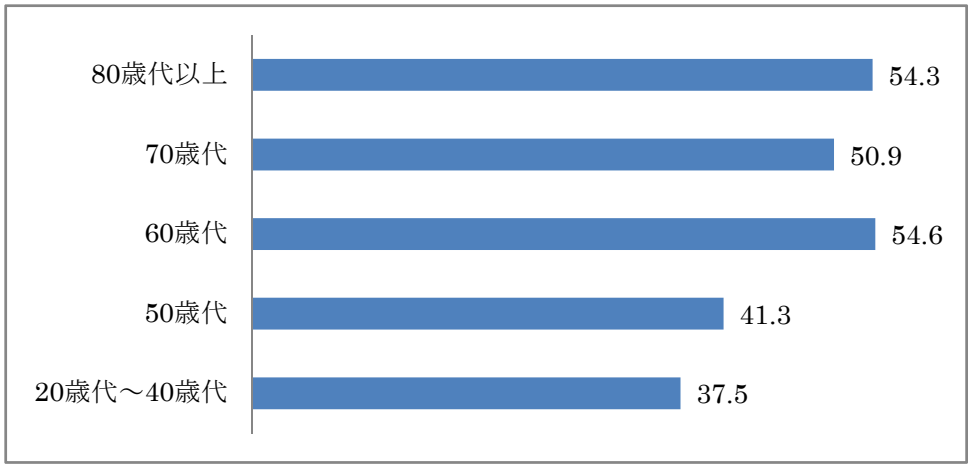
「東京大学基金への寄付を決められる際に留意されたのはどのような点ですか（複数回答可）」について、年齢別、男女別での差異を見てみる。

まず、年齢別での差異を関しては、図表 3－9 から分かるように、①「寄付金額」について、5 割以上になっているのは、「60 歳代」（54.6%）、「70 歳代」（50.9%）、「80 歳代」（54.3%）である。比較的この割合が低いのは「20 歳代～40 歳代」（37.5%）、「50 歳代」（41.3%）である。

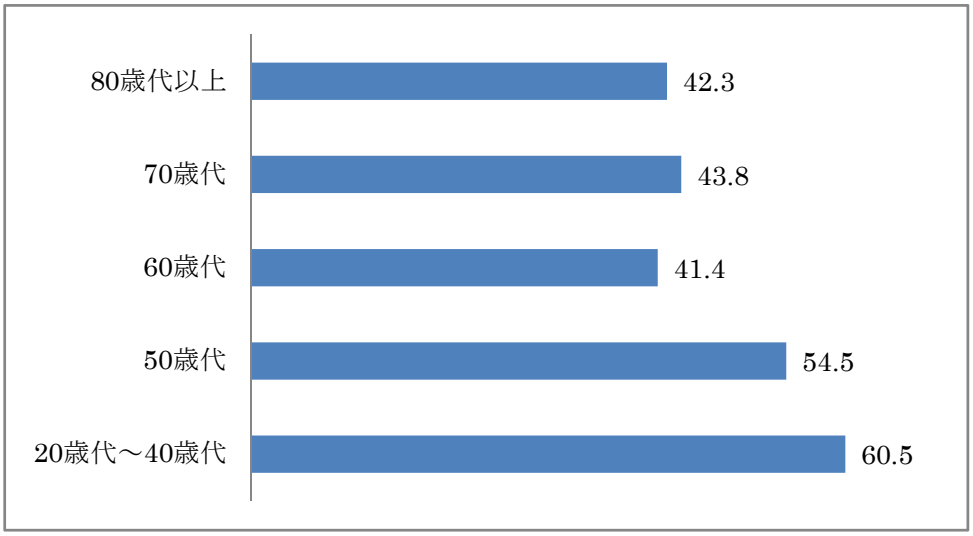
②「特に留意した点はない」について、割合がもっとも高いのは「20 歳代～40 歳代」（60.5%）、次いで、「50 歳代」（54.5%）である。４割台となっているのは。「60 歳代」（41.4%）、「70 歳代」（43.8%）、「80 歳代以上」（42.3%）である。

図表 3－9　年齢別から見た寄付を決める際の留意点の差異（%）

①寄付金額



②特に留意した点はない

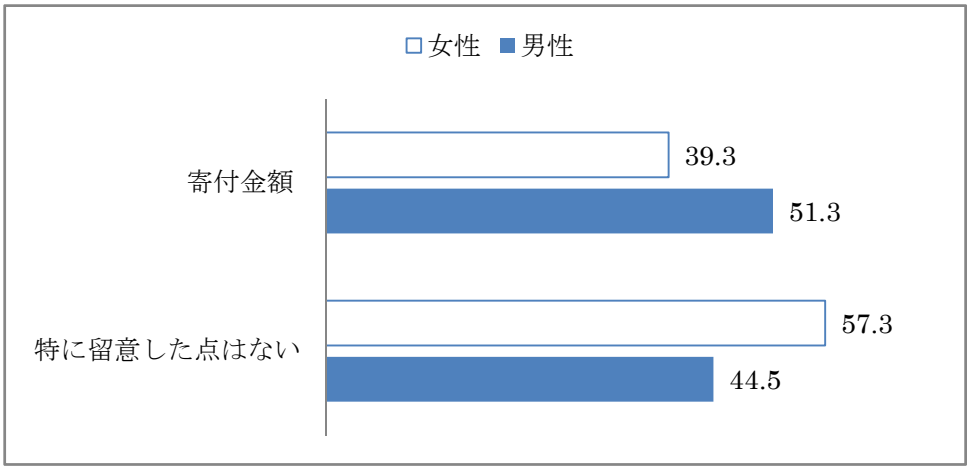


（N=1536）

また、男女別では、同じく「寄付金額」と「特に留意した点はない」という二つの項目について統計的な有意な差がみられた。

「寄付金額」について、「女性」（39.3%）より「男性」（51.3%）の方が割合は高い。「特に留意した点はない」の場合は、「女性」で 57.3%と、「男性」（44.5%）より割合が高いことが分かる。

図表 3－10　男女別から見た寄付を決める際の留意点の差異（%）



（N=1435）

３）寄付金額別から見た差異

さらに寄付金額別から「寄付を決める際の留意点」の差異を見てみる（図表 3－11）。

①「寄付金額」については、「30～99 万円」でもっとも高く、59.7%である。次いで、「100 万円以上」（55%）、「10～29 万円」（51.2%）、「5～9 万円」（48.1%）、「5 万以下」（39.4%）の順となっている。寄付金額が高い場合は、寄付を決める際に「寄付金額」を留意する割合が高い傾向が見られる。

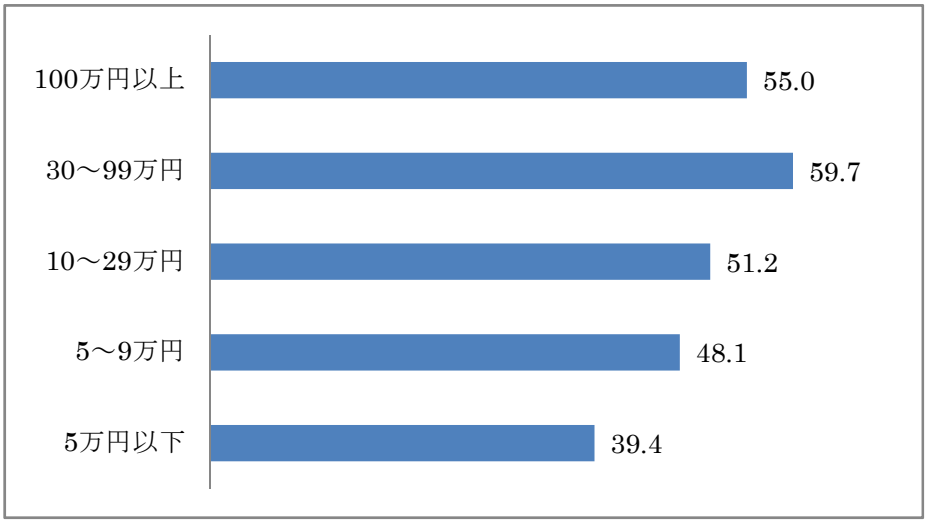
②「他からの寄付の要請との選択」について、「100 万円以上」でもっとも高く、17.5%である。これ

に対して、もっとも低いのは「5 万円未満」の 5.9%である。その他の三つのグループに関しては、「30～99 万円」（9.1%）、「10～29 万円」（8.2%）、「5～9 万円」（9.2%）と、差はほとんどない。

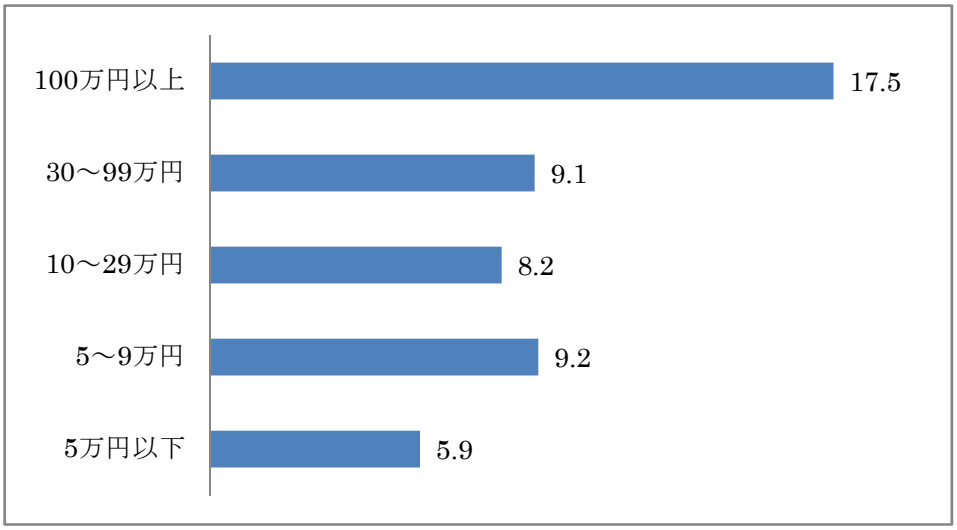
③「特に留意した点はない」の割合は、「寄付金額」が低くなるに従って逆に高くなっている傾向が見られる。寄付金額が高い場合はより慎重であると考えられる。

図表 3－11　寄付金額別から見た寄付を決める際の留意点の差異（%）

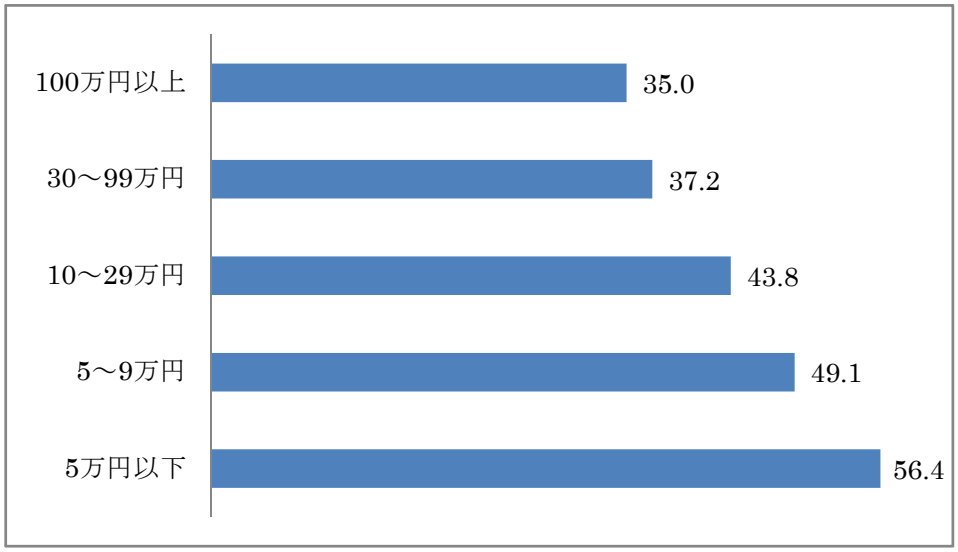
①寄付金額



②他からの寄付の要請との選択



③特に留意した点はない



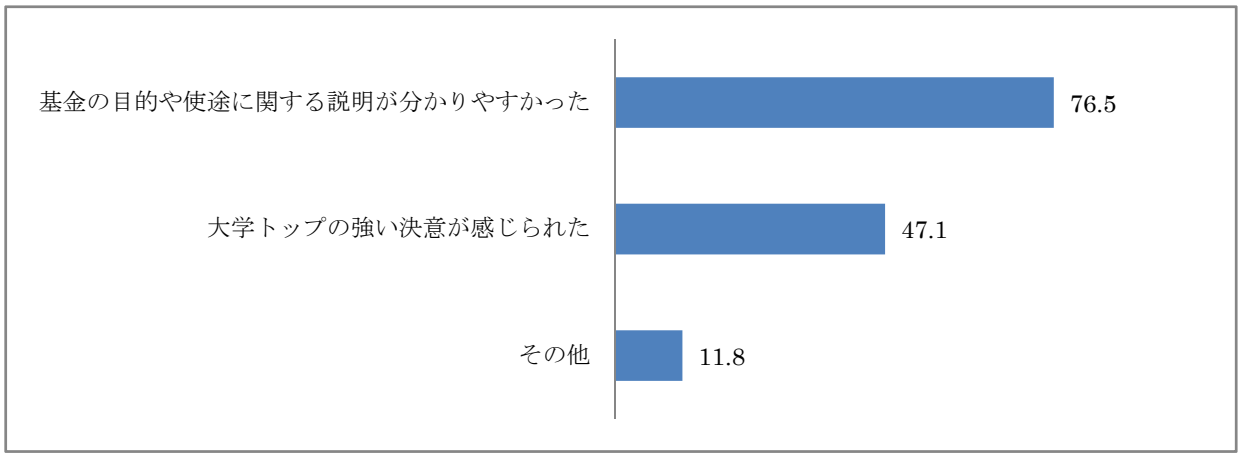
（N=1495）

第４章　同窓会と基金の募集事業に対する評価と要望

１．東大関係者と同窓会からの働きかけと寄付動機

第１章で明らかにしたように、設問「東京大学基金に寄付下さった動機は何ですか（複数回答可）」に対して、「東京大学関係者からの働きかけがあったため」、または「同窓会からの働きかけがあったため」と回答したのは、それぞれ 8.5%であり、合わせれば 17%となっている。このような回答をした寄付者に、東京大学関係者や同窓会からの働きかけがあった際に、どのような要因がもっとも大きかったか、という問い（複数回答可）に対して、「基金の目的や使途に関する説明が分かりやすかった」と回答したのは 76.5%、「大学トップの強い決意が感じられた」との回答は 47.1%で、「その他」11.8%となっている（図表 4－1）。

図表 4－1　東京大学関係者や同窓会からの働きかけがあった際にもっとも大きいと思われた要因（%）



（N= 17）

上記の質問に対する自由回答の内容をまとめてみると、図表 4－2 に示す結果となっている。

「働きかけ」と関連する回答はもっとも多く、12 件がある。たとえば、「当時の佐々木総長の働きかけ」、「教授の命令」、「企業のトップが基金集めの役員になり、熱心に集めた」、「同窓会関係からの要請」がある。

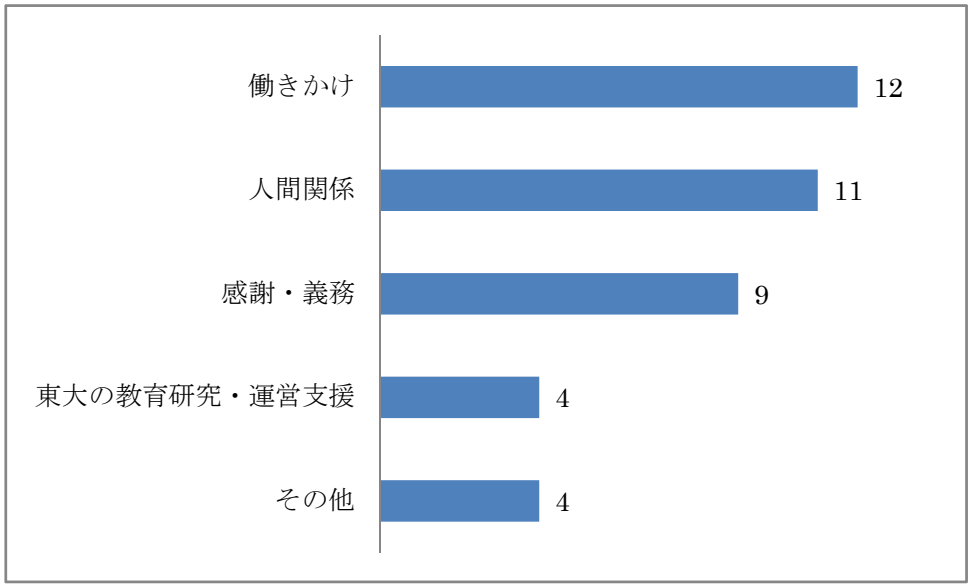
続いて、**「人間関係」**に関する回答は 11 件である。例をあげると、「友人が理事だった（学長も同期）」、「旧制一高出身者を東大同窓の仲間にして下さったから」、「駒場時代の友人と今も交流し得るところが多い。東大卒という肩書は自分が思う以上に通用してきた」、「総長が同じ専攻の知り合いであった為」などがある。

「感謝・義務」に関する回答は 9 件がある。たとえば、「迷っていたが背を押された感じ」、「ホームカミングディ出演の義理で」、「これで、母校に貢献してこなかったことに気づき感謝の念をこめて寄付した」など。

「教育研究・運営支援」に関しては、4 件がある。たとえば、「独立行政法人となり、国からの交付金が－１％/年となりこれは大変と思った」、「戦後は大学が粗製濫造され、大学に値しないといった慨嘆も聞く当今である。凛々とした使命感を持つ大学が教育・研究に力を入れて、他の範たらんとする意欲が感じられる」。

「その他」は 4 件がある。

図表 4－2　東京大学関係者や同窓会からの働きかけがあった際にもっとも大きいと思われた要因（自由回答）



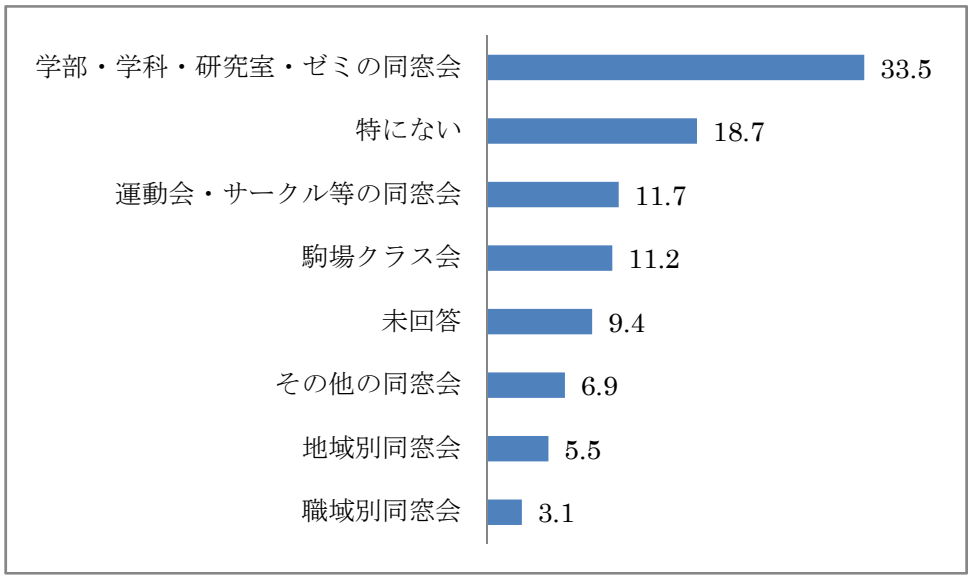
(N=40 件)

２．同窓会と基金の募集事業に対する評価

設問「あなたがもっとも熱心に参加されている同窓会はどれですか。一つ選んで下さい」に対する回答の結果は図表 4－3 に示している。「学部・学科・研究室・ゼミの同窓会」がもっとも多く、33.5%、

次いで、「特にない」(18.7%)「運動会・サークル等の同窓会」(11.7%)、「駒場クラス会」(11.2%)、「未回答」(9.4%)、「その他の同窓会」(6.9%)、「地域別同窓会」(5.5%)、「職域別同窓会」(3.1%) の順である。

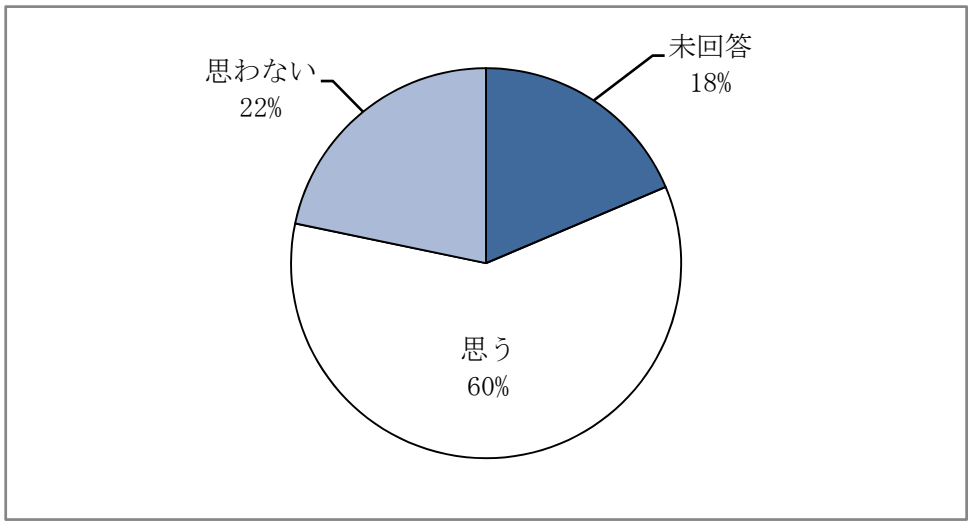
図表 4－3　寄付者のもっとも熱心に参加した同窓会（%）



(N=1569)

引き続き、「その同窓会の活動は活発に行われていると思いますか」という設問に、「思う」と回答したのは 60%、「思わない」の回答は 22%、「未回答」は 18%である（図表 4－4)。

図表 4－4　同窓会の活動について



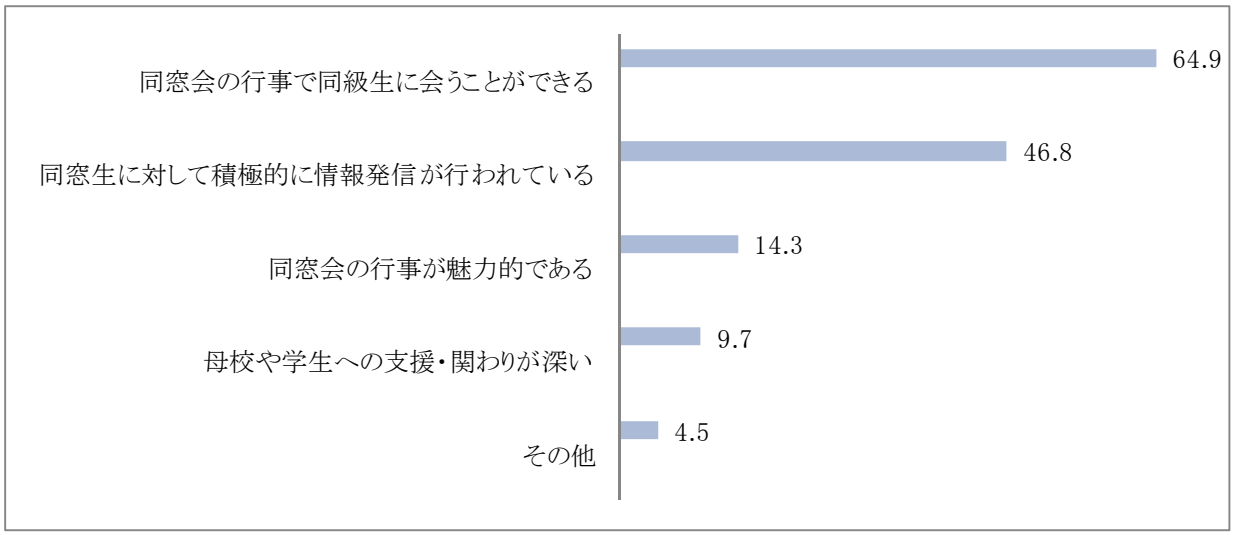
(N=1569)

1）同窓会の活動が活発に行われていると思う要因

さらに、上記の同窓会の活動は活発に行われていると「思う」寄付者に「それはどのような点ですか

（複数回答可）」とたずねると、図 4－5 に示すような結果を得た。「同窓会の行事で同級生に会うことができる」がもっとも多く、64.9%、次いで、「同窓生に対して積極的に情報発信が行われている」46.8%、「同窓会の行事が魅力的である」14.3%、「母校や学生への支援・関わりが深い」9.7%、「その他」4.5%の順である。

図 4－5　同窓会の活動が活発に行われていると思う要因（%）



（N=936）

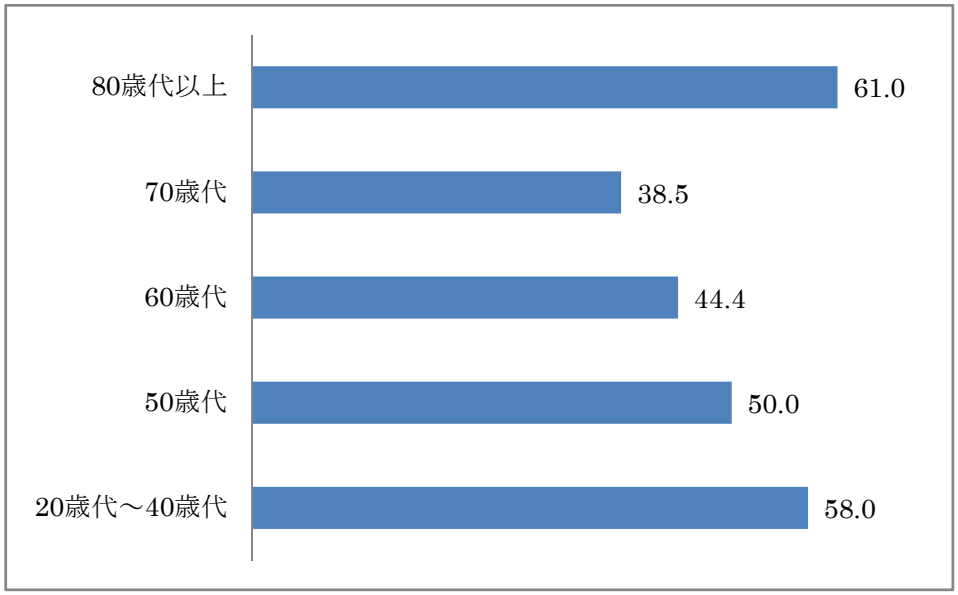
上記の項目について、年齢別で図表 4－6 に示すような統計的に有意な差異が見られた。

「同窓生に対して積極的に情報発信が行われている」について「そう思う」と回答する割合は、「80 歳代以上」の場合はもっとも高く、61%である。他の歳代に関しては、「20 歳代～40 歳代」は 58%、「50 歳代」は 50%、「60 歳代」は 44.4%、「70 歳代」は 38.5%である。すなわち、「80 歳代以上」をのぞけば、年代は高ければ高いほど、肯定的な回答の割合が低いことである。

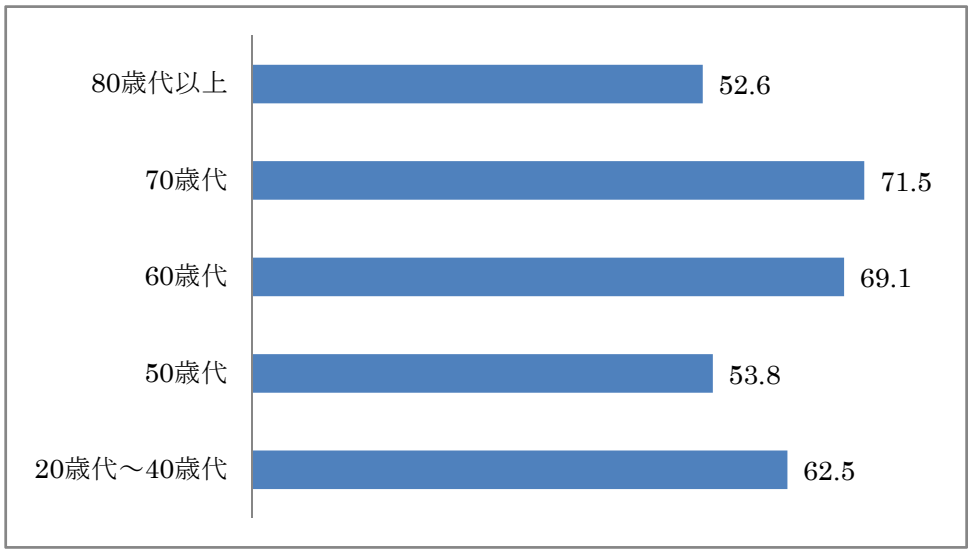
また、「同窓会の行事で同級生に会うことができる」について「そう思う」と回答する割合がもっとも高いは「70 歳代」で、71.5%である。続いて、「60 歳代」69.1%、「20 歳代～40 歳代」62.5%、「50 歳代」53.8%、「80 歳代以上」52.6%の順である。

図表 4－6　同窓会の活動が活発に行われていると思う要因の年齢別の差異（%）

① 同窓生に対して積極的に情報発信が行われている



② 同窓会の行事で同級生に会うことができる



(N=1495)

「同窓会の活動が活発に行われていると思う要因」についての自由回答をいくつかの項目にまとめた結果は、図表 4－7 に示している。

まず同窓会の「**招集者熱心**」のような回答がもっとも多く、14 件である。具体的な例をあげると、次のようである。「研究室の同窓会を想定しています。研究室の恩師が高齢にも拘わらずお元気であり会の運営に中心となっている人がいるため」、「毎年 home coming party に合わせてクラス会を開催している」、「活性化・拡大へ向けて、幹事が積極的に活動している」、「幹事がえらい。いつも献身的にやって下さる」。

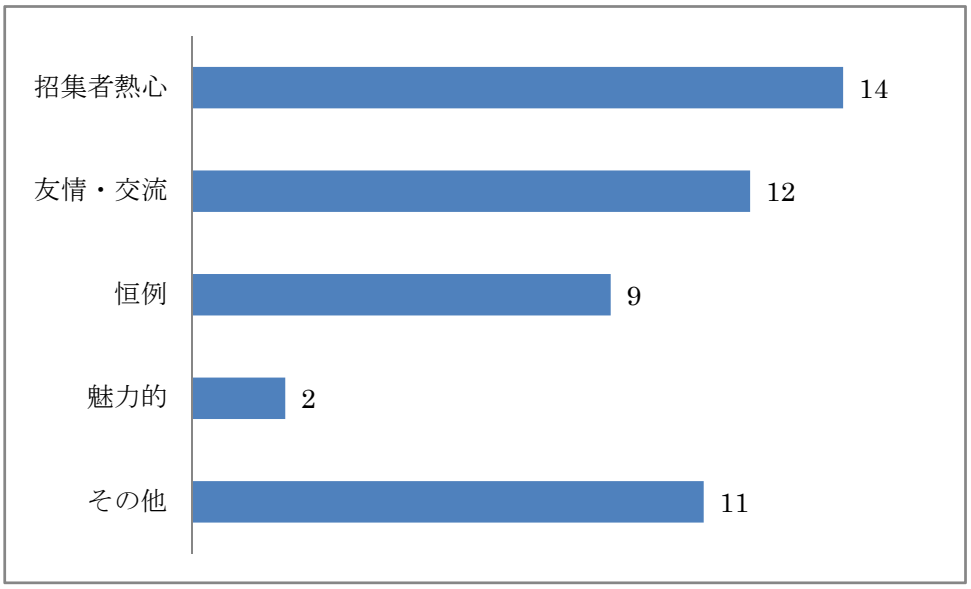
続いて、**「友情・交流」**と回答したのは 13 件である。たとえば、「機械の本部同窓会、東海地区同窓会に毎回参加しています。顔馴染みが参加していることが理由ですが、違う年代の方々と仕事を離れた話ができることです」、「駒場（教養学部）時代の第二外国語（中国語）を一緒に学んだ学友が卒業後も親しく付き合えている」、「研究室の同窓会、人間関係が素晴らしいと思っております」、「異業種交流が出来る。現役の学生との交流ができ、若者の考え方の一端を知ることが出来る」。

原因は活動が**「恒例」**であると回答したのは 9 件である。たとえば、「恒例行事となっている」、「駒場時代の友人（自分を含めて４人）と定期的に（２・３か月に１回）学士会館で懇談している」、「第二工学部応用科学科昭和 24 年度卒業生で毎年１回クラス会を行っている」などがある。

また、活動が**「魅力的」**であると回答したのは 2 件がある。

そのほかに、**「その他」**にまとめたのは、「若い人の参加が少ない」、「やっと活動が見えてきた。余りやり過ぎる必要もないが、続けてほしい」、「地方出身につき旧制高校兼地元の活動が活発である。それに比較して東京大学は、東京都に活動が集中している」などの意見が見られた。

図表 4－7　同窓会の活動が活発に行われていると思う要因(自由回答)

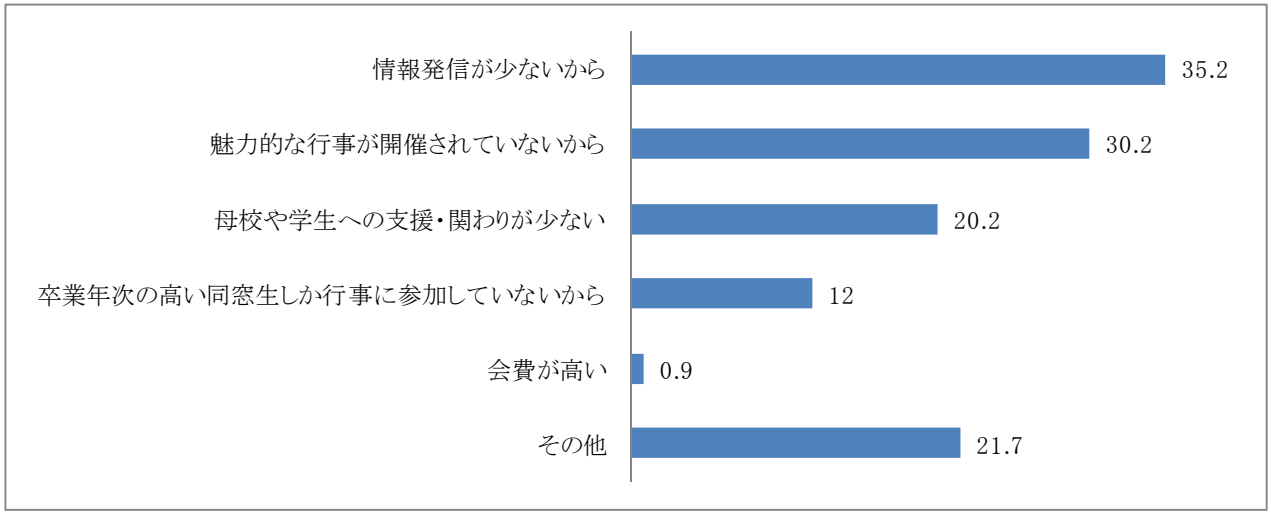


(N= 48 件)

２）同窓会の活動が活発に行われていないと思う要因

逆に、上記の同窓会の活動は活発に行われていると「思わない」寄付者に「それはなぜですか（複数回答可)」と尋ねると、その回答を図表 4－8 にまとめている。「情報発信が少ないから」もっとも多く、35.2%である。次いで、「魅力的な行事が開催されていないから」（30.2%）、「その他」（21.7%）、「母校や学生への支援・関わりが少ない」（20.2%）、「卒業年次の高い同窓生しか行事に参加していないから」（12%）、「会費が高い」（0.9%）の順となっている。

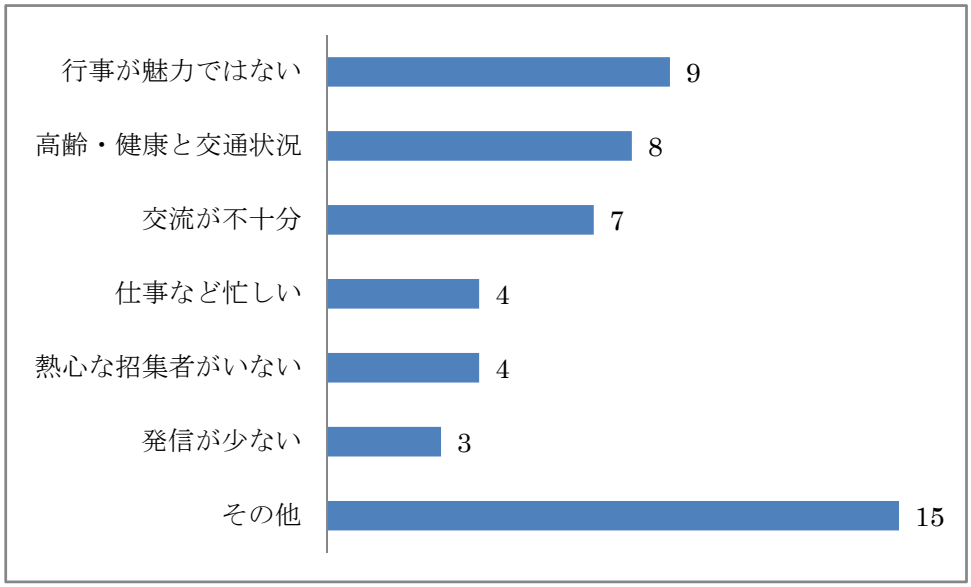
図表 4－8　同窓会の活動が活発に行われていると思わない要因（%）



(N=341)

同窓会の活動が活発に行われていると思わない要因についての自由回答をいくつかの項目を設け、まとめた結果を図表 4－9 に示している。

図表 4－9　同窓会の活動は活発に行われていると思わない原因（自由回答）



(N= 50 件)

「行事が魅力ではない」との回答は 9 件である。次のような例をあげられる、「親睦会に過ぎない」、「殆ど退職して集る意味が無くなったからです」、「集まること、久しぶりに会うこと自体が目的化していてそこから発展する行事が少ない」。

「高齢・健康と交通状況」との回答は 8 件である。たとえば、「高齢化により現在参加できない」、「高齢のため会合消滅」、「健康上活動できない」、「高齢により体調が衰えてきて遠出が難しくなって来てい

る」。

「交流が不十分」に関連する回答は 7 件である。たとえば、「交流の頻度が少ない」、「同窓会はたまにしか開かれていません」、「数年に 1 度と頻度が少ない」。

「仕事など忙しい」と回答したのは 4 件である。たとえば、「会社や家族のことで忙しい」、「現在時間的にゆとりがなく同窓会への関心が小さい。余裕ができたら参加したいと考えている」。

「熱心な招集者がいない」との回答は 4 件である。たとえば、「核になる人がいない」、「町会長にはじまり、地域の諸団体、サークル等に多くの友人が出来たが同期・同窓は全くいない。東大卒はこのような活動、旗振り役は嫌いな人が多いのか」。

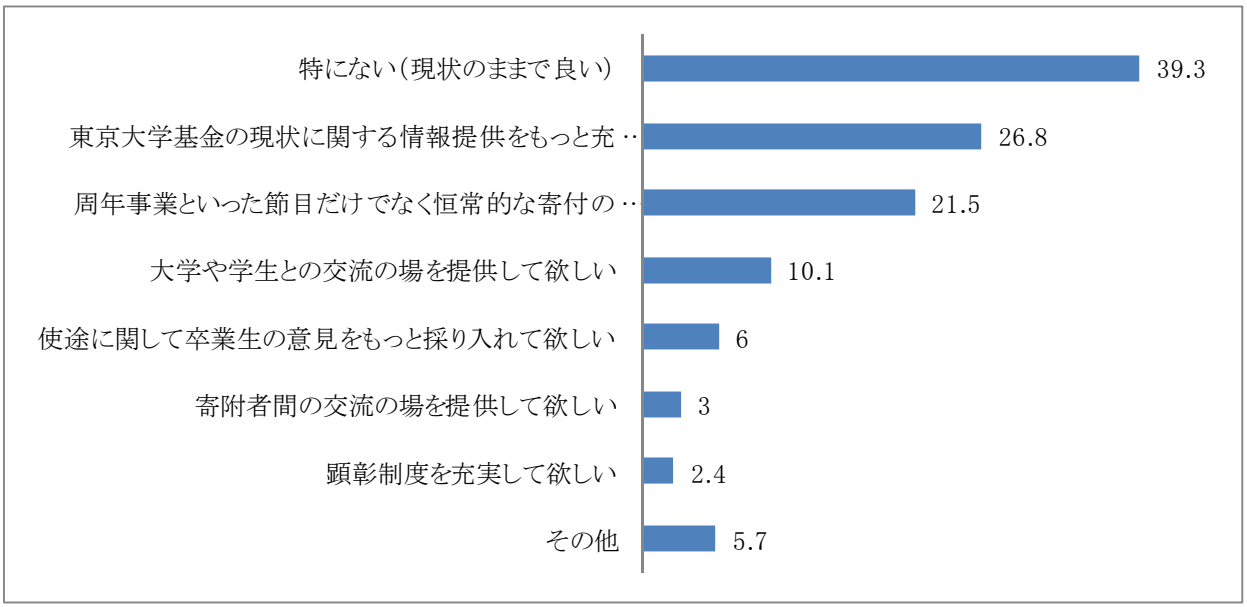
また「地方に住んでいるので、同窓会行事等に参加困難。且つ情報も少ない」、「名簿発行を望む。クラスメートの消息がわからない！」と**「発信が少ない」**との回答は 3 件がある。

そのほか、「慶応や早稲田に較べて団結力がうすい」、「卒業後長期間経っているので、又、環境（家庭経済）上、同窓会に出席がかなわない」など**「その他」**の意見が 15 件ある。

３．基金の募集事業に対する要望

設問「基金の募集事業について改善すべき点があるとすれば、どのような点ですか（複数回答可)」に対する回答は、図表 4－10 に示している。具体的には、「特にない（現状のままで良い）との回答がもっと多く、39.3%、次いで、「東京大学基金の現状に関する情報提供をもっと充実して欲しい」（26.8%）、「周年事業といった節目だけでなく恒常的な寄付の募集活動に注力すべきである」（21.5%）、「大学や学生との交流の場を提供して欲しい」（10.1%）、「使途に関して卒業生の意見をもっと採り入れて欲しい」（６%）、「その他」（5.7%）、「寄附者間の交流の場を提供して欲しい」（3%）、「顕彰制度を充実して欲しい」（2.4%）の順である。

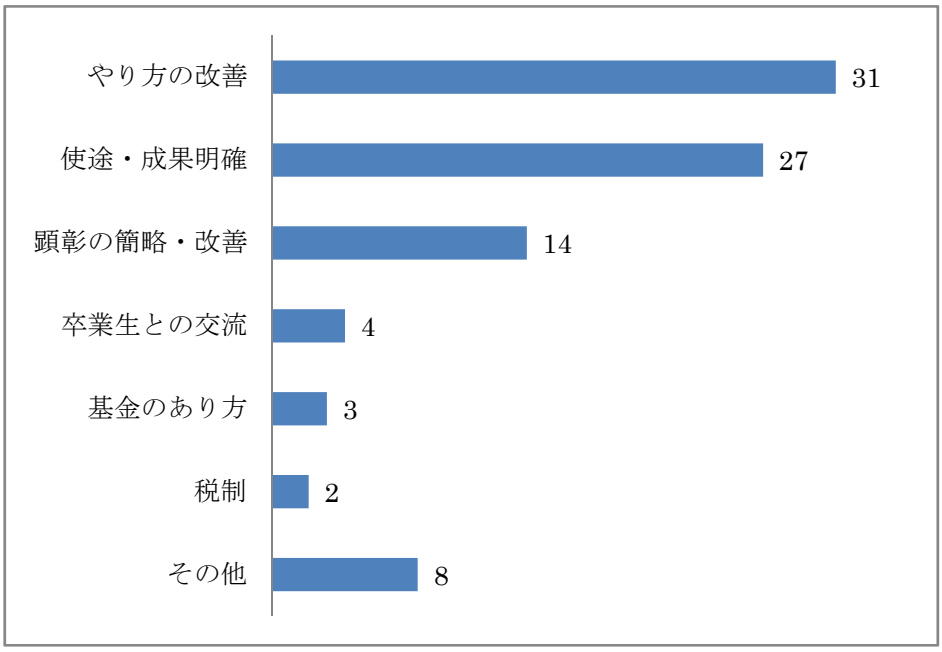
図表 4－10　基金の募集事業に対する要望（%）



(N=1569)

基金の募集事業対する要望の自由回答をいくつかの項目を設けて整理すると、次のような結果となっている（図表 4－11）。

図表 4－11　基金の募集事業に対する要望（自由回答）



（N=89 件）

「やり方の改善」について、31 件がある。たとえば、「東京大学は規模が大きいので学部単位の働きかけが良いと思う。米ミシガン大学修士を卒業したが学部の働きかけをメインとし、学校全体の働きかけも含めて活発にコミュニケーションがとられている」、「寄付者に達成感を持たせ他人にもすすめ、更に金を集められるようにしたい。要は実績成果をあげてもらうことか」、「取扱い金融機関を郵便局にまで拡大していただきたい」、「卒業生に対する働きかけが少ない。もっといろいろなルートで働きかけを強化し全員が応募する位にもって行くべきではないか」など。

「使途・成果明確」は 27 件である。例をあげると、次のようである。「『募集要項』における『主な基金使途』の内訳の説明文がやや抽象的。もっと具体的かつ実際的な分数による説明を求めたい。『申込書』における『寄付目的』も同じ」、「東大の活動目標を成果、特に募金によってどう変わってゆくかをしっかり伝えて欲しい」、「使途を透明性あるものに保ち、絶対に不正使用の無いようにさえしていただければ条件はつけません」。

「顕彰の簡略・改善」に関して、14 件がある。たとえば、「顕彰は紙一枚で充分」、「卒業者が学内施設（図書館・博物館等）を利用できるようにして下さい」、「記念にプレートを戴きました。キーホルダーくらいの大きさだと思っていたのに、B5 弱くらいの大きさのものが届き、驚き、また置き場所に困った。他の大学は領収書と感謝状と、（金額に驚いて確認の TEL をしてきた）だけである。東大は無駄な金を使っていると思う。研究費に回すべきだ」、「駆け出しの会員と永年会員とは、特典差をつけるべきだ。」など。

「卒業生との交流」に関する意見はそれぞれ 4 件がある。たとえば、「大学の運営について、卒業生の

意向を支援できる制度を作ってほしい。現状では OBOG は大学の制度外に置かれている」、「同窓会館までとは行かなくても、キャンパスの一部に卒業生が使用できるラウンジ、読書室等があれば、卒業生はもっと大学に親しみを持てると思う」など。

「基金のあり方」に関する意見が 3 件ある。たとえば、「単なる寄付と基金の差を明確にすべき。即ち、基金は財産（ストック）を築くものであり、今後が重要」、「恒久的『基金』を積み上げるべき。但し、運用的『透明性』を持つこと。一部の者だけが、関与することがなく、第三者のチェックを入れること」などがある。

「税制上の優遇措置を前面に出すべき」、「近年の募集事業活動の積極化は大いに評価しています。今回のこのアンケートを実施されたことも同上です」、「一般には税制との関係をよりインセンティブに出来るように努力すべき」など**「税制」**に関する意見が 2 件ある。

以上の分類にあてはまらない**「その他」**が 8 件ある。

４．寄付金額別から見た差異

寄付金額別から「基金の募集事業について改善すべき点」に関して、統計的に有意な差異が次のような項目でみられた（図表 4－12）。

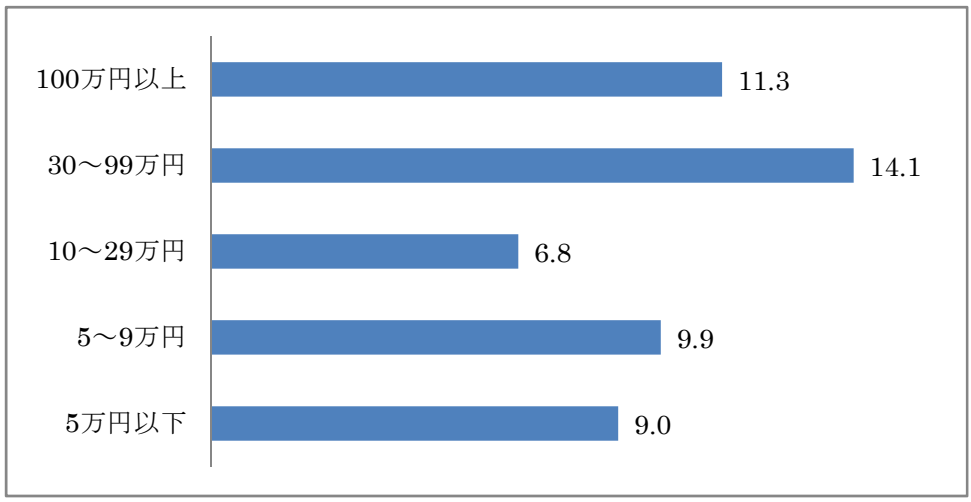
まず、「大学や学生との交流の場を提供して欲しい」について、もっとも高い割合を示したのは、「30～99 万円」14.1％で、続いて、「100 万円以上」11.3％、「5～9 万円」9.9％、「5 万円以下」9.0％、「10～29 万円」6.8％の順である。寄付額が高い（30 万円以上）方がこの点について希望する割合が高い傾向がある。

また、「周年事業といった節目だけでなく恒常的な寄付の募集活動に注力すべきである」とされる割合がもっとも高いのは、「10～29 万円」の 25.6％、続いて、「100 万円以上」23.8％、「30～99 万円」23.7％、「5～9 万円」20.5％、「5 万円以下」16.7％の順である。

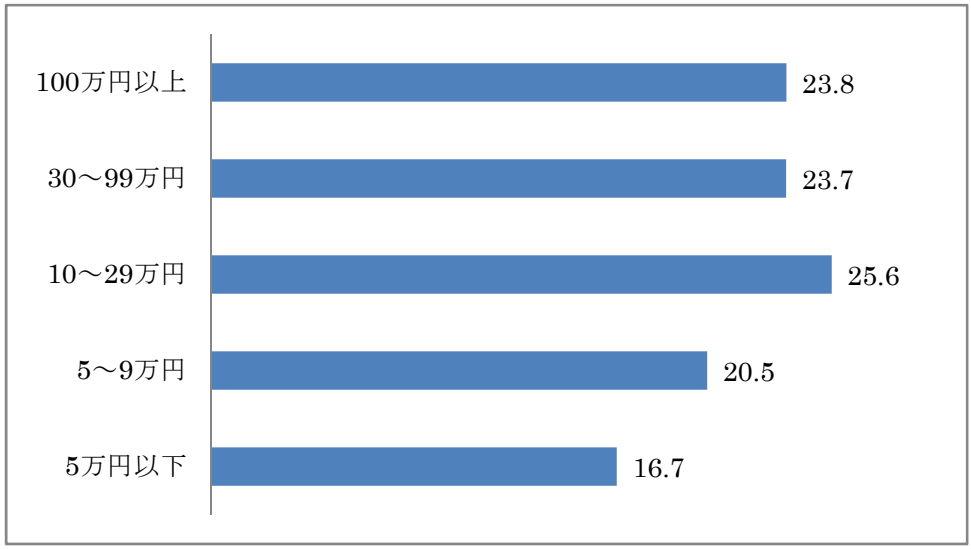
さらに、「特にない（現状のままで良い）」とされた割合がもっとも高いのは、「5 万円以下」46.0％、続いて、「5～9 万円」41.6％、「10～29 万円」38.4％、「30～99 万円」35.0％、「100 万円以上」31.3％の順である。すなわち、寄付額が高ければ高いほど、「特にない（現状のままで良い）」と回答した割合が低い。

図表 4－12　寄付金額別から見た差異（％）

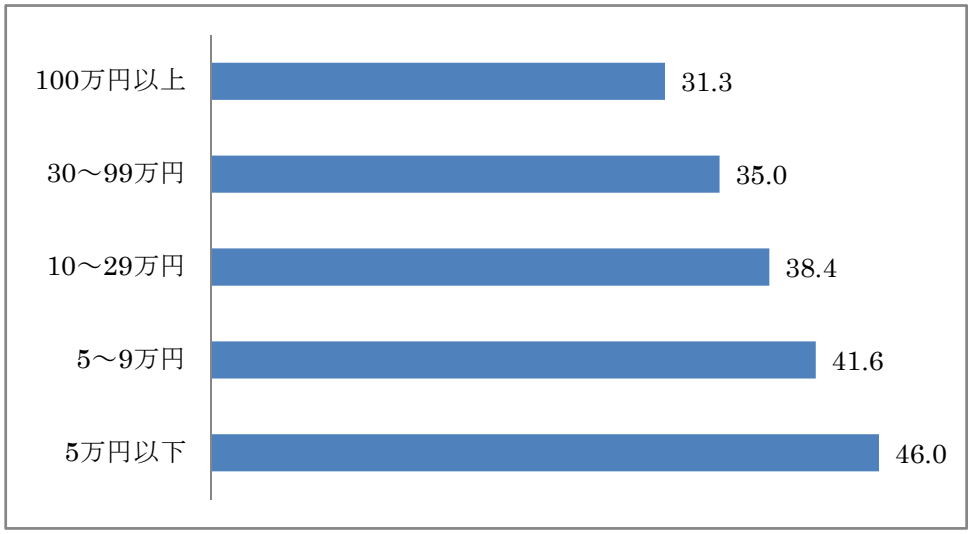
① 大学や学生との交流の場を提供して欲しい



② 周年事業といった節目だけでなく恒常的な寄付の募集活動に注力すべきである



③ 特にない（現状のままで良い）



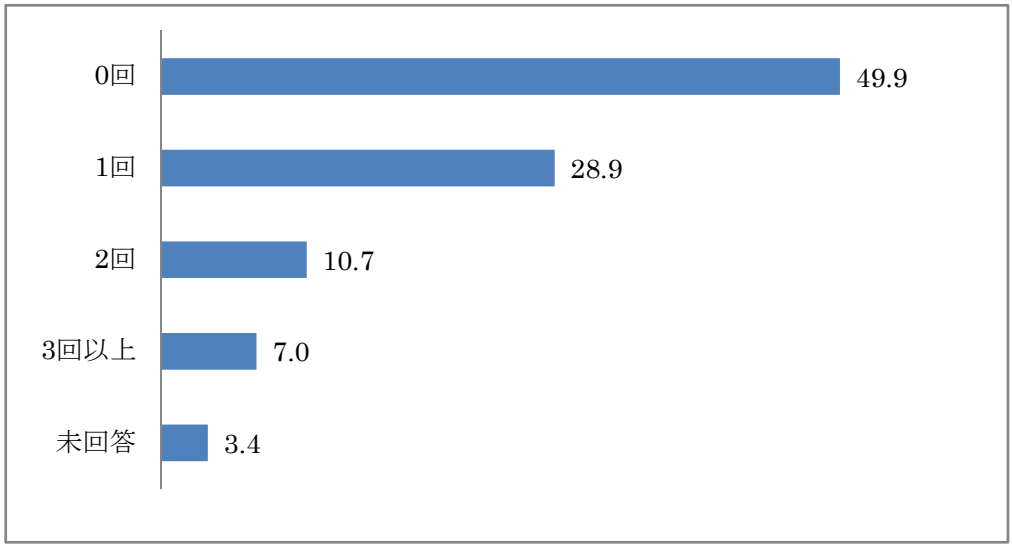
（N=1495）

第 5 章　東京大学の支援に対する意思

1. 寄付回数の分布

過去の東京大学への寄付の回数（今回を除く）をたずねたところ、図表 5－1 に示すように「0 回」が 49.9%と全体の半数を占めた。今回の東京大学基金への寄付が初めての経験だった寄付者が多いことがうかがえる。そのほか、「1 回」28.9%、「2 回」10.7%、「3 回以上」が 7.0%。「未回答」3.4%の順である。回数の増加に従い、割合が減少している。

図表 5－1　寄付回数の分布（%）

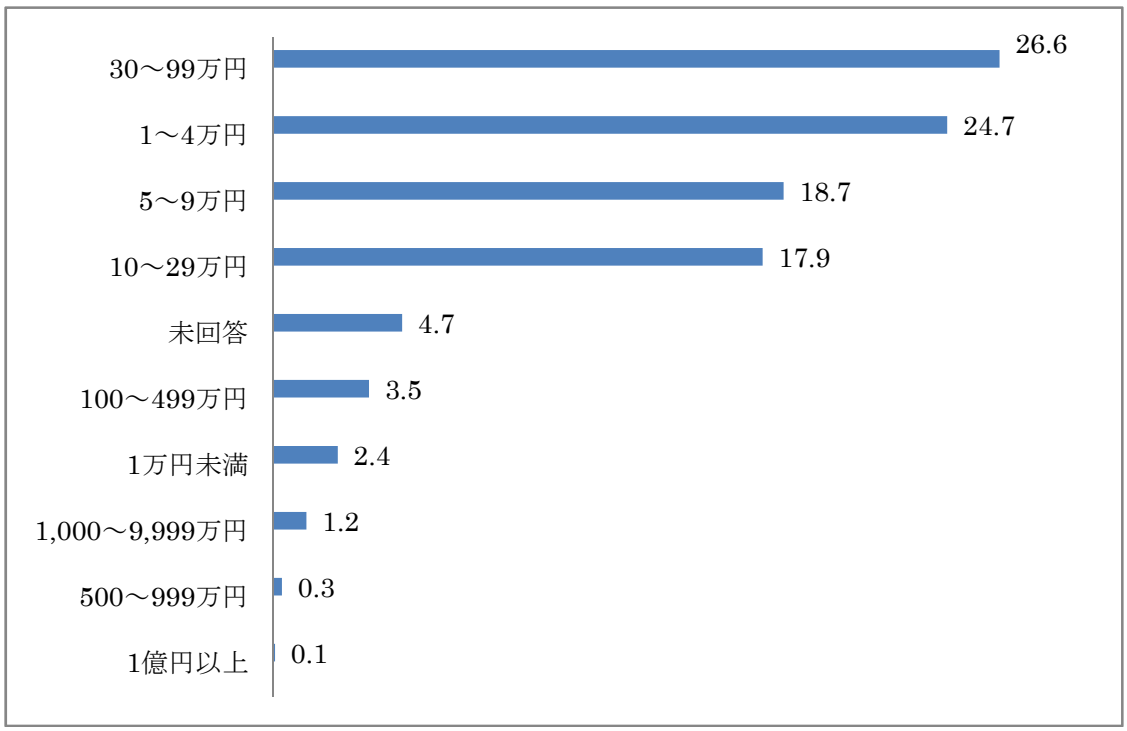


（N＝1569）

２．寄付額の分布

寄付額の分布（図表 5－2）を見てみると、「30～99 万円」の割合がもっとも多く、26.6%である。次いで、「1～4 万円」24.7%、「5～9 万円」18.7%、「10～29 万円」17.9%、「100～499 万円」3.5%、「1 万円未満」2.4%、「1,000～9,999 万円」1.2%、「500～999 万円」0.3%、「1 億円以上」0.1%となっている。

図表 5－2　寄付額の分布（%）

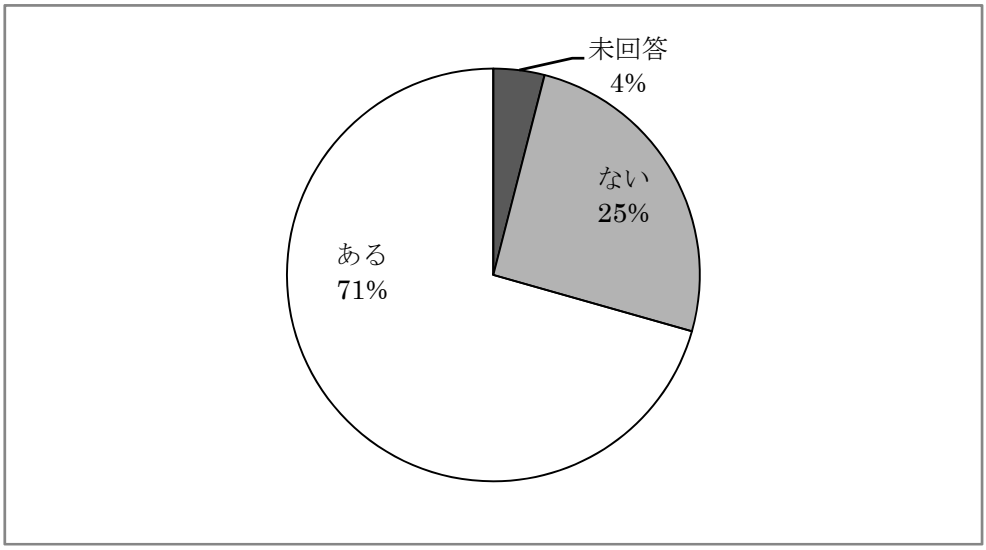


（N＝1569）

３．他の大学や団体などへの寄付

他の大学や団体等の寄付の経験をたずねると、図表 5－3 に示すように、「ある」との回答が 70.6%に達しており、「ない」との回答は 25%である。

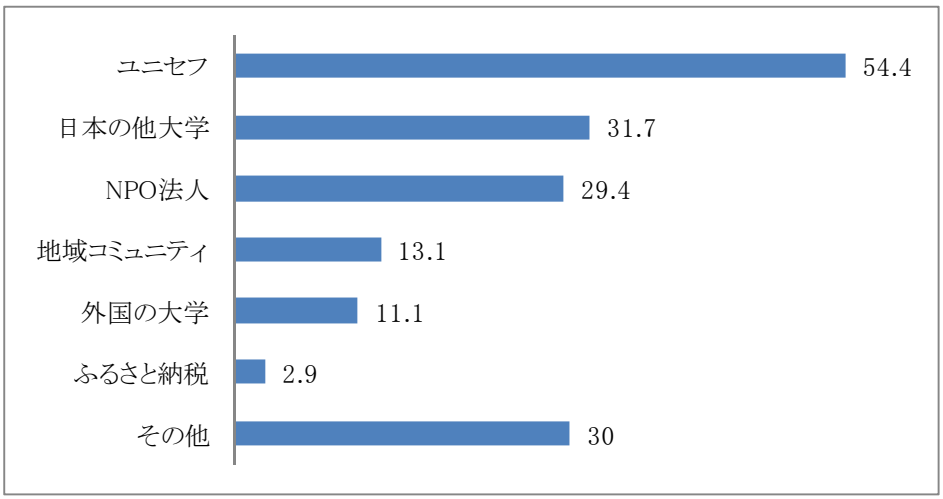
図表 5－3　他の大学や団体などへの寄付



(N＝1569)

他の大学や団体などへの寄付が「ある」との回答者に具体的な対象先を聞いたところ、図表 5－4 に示すような結果となっている。すなわち、「ユニセフ」(54.4%)、「日本の他大学」(31.7%)、「その他」(30%)、「NPO 法人」(29.4%) の順に多かった（複数回答可)。

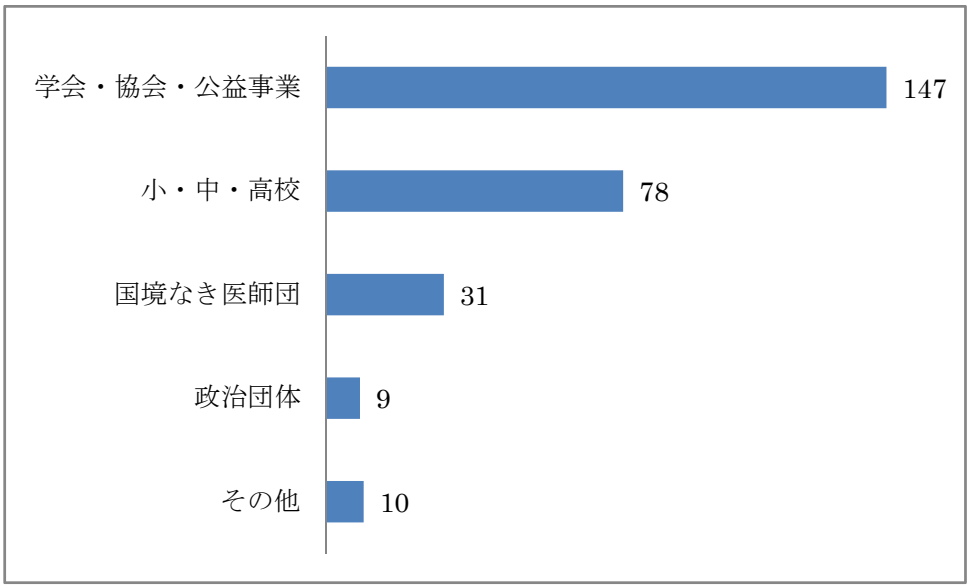
図表 5－4　他の大学や団体などへの寄付対象先（%）



（N=1107）

「その他」として多くあがったのが、主な寄付対象先は、「学会や協会、公益事業」(147 件)、「出身小・中・高等学校」(78 件)、「国境なき医師団」(31 件)、「政治団体」(9 件)(図表 5－5)である。

図表 5－5　他の大学や団体などへの寄付対象先(件)

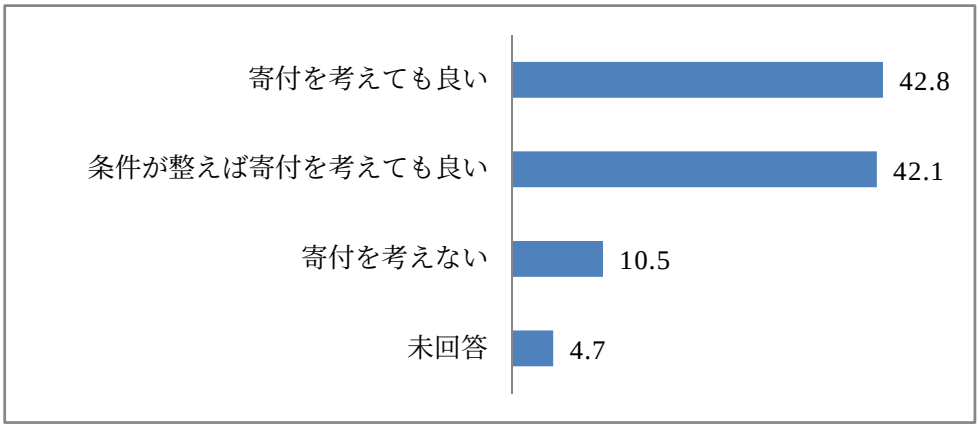


(N=275 件)

4．寄付を通じて東京大学を支援する意思・条件及び寄付形態

1）意思と条件

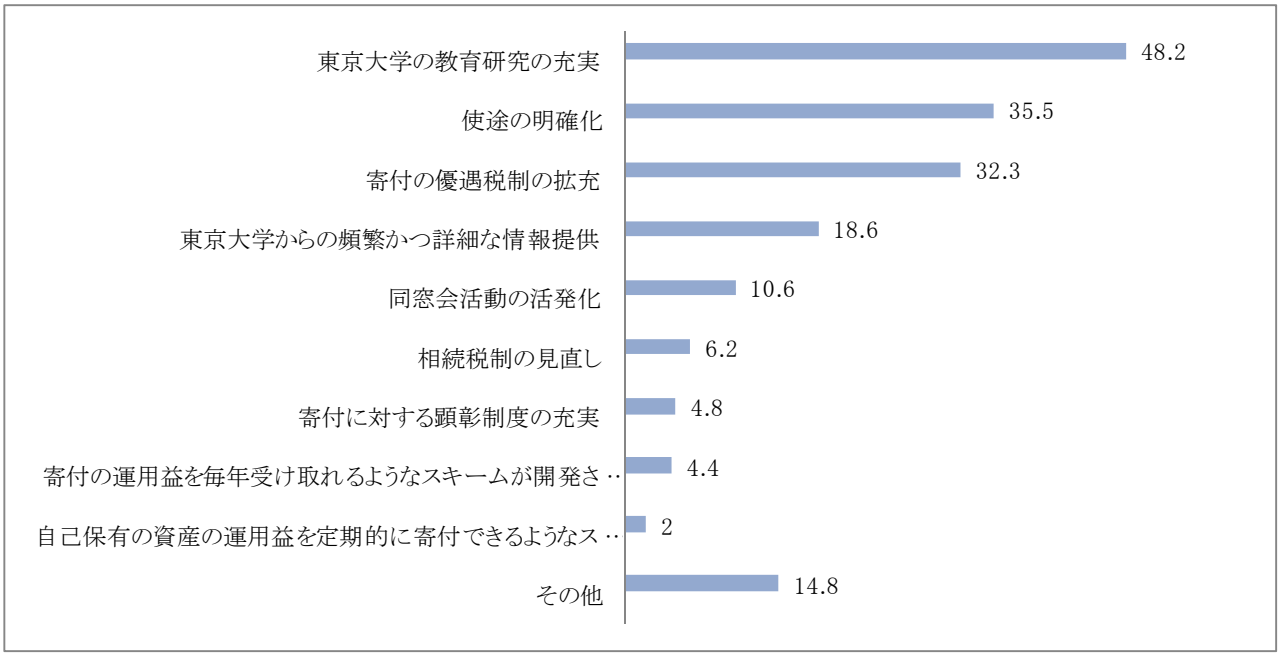
図表 5－6　寄付を通じて東京大学を支援する意思(%)



(N=1569)

今後の東京大学に対する寄付の意志に関しては、図表 5－6 に示すように、「寄付を考えても良い」と「条件が整えば寄付を考えても良い」がそれぞれ 42.8%、42.1%とほぼ同じ割合で並び、「寄付を考えない」は 10.5%にとどまった。

図表 5－7　寄付を通じて東京大学を支援する条件（%）



（N=660）

「条件が整えば寄付を考えても良い」を選んだ回答者があげた「条件」としては、「東京大学の教育研究の充実」（48.2%）、「使途の明確化」（35.5%）、「寄付の優遇税制の拡充」（32.3%）、「東京大学からの頻繁かつ詳細な情報提供」（18.6%）、「その他」（14.8%）、「同窓会の活発化」（10.6%）、「相続税制の見直し」（6.2%）、「寄付に対する顕彰制度の充実」（4.8%）、「寄付の運用益を毎年受け取れるようなスキームが開発された場合」（4.4%）、「自己保有の資産の運用益を定期的に寄付できるようなスキームが開発された場合」（2.0%）である。

上記の質問に対する自由回答をまとめれば、次のような結果となっている（図表 5－8）。

「経済状況」に関する回答はもっとも多く、36 件がある。たとえば、「自己資金に余裕ができれば」、「自らの生活に更なる余裕が出来た時」、「株式市場が回復して資金面の余裕ができること」、「年金生活者なので、日常生活費に特別の出費がなく家計にゆとりがあれば」がある。

「使途と成果の明確」に関する回答は 14 件である。たとえば、「有能な日本人学生や親日的な外国人留学生を東京大学に受け入れるための奨学金制度の拡充」、「成果を挙げてほしい。特に海外からの評価が挙がること一評価基準を作ったらどうか」、「基金による成果、あといくらあると何が出来るかという明確なプラン・大学として、コストダウンした項目の詳細など」がある。

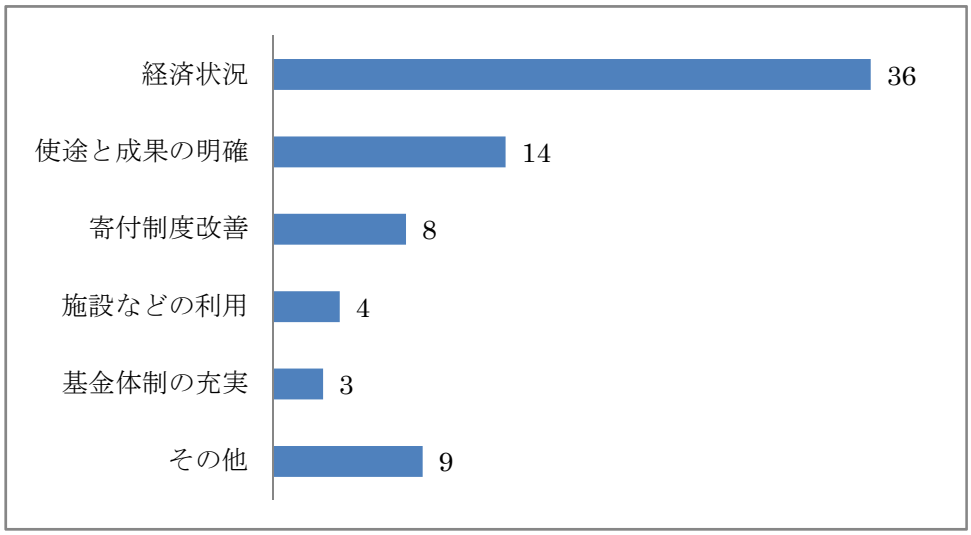
「寄付制度改善」に関しては 8 件がある。たとえば、「毎年定期的寄付する自動振込制度と公開セミナー等への優遇受付など。浅く広く集めること」、「少額でも月払い、年払い制があれば草の根会員が獲得できるのでは？」、「20 歳代～90 歳代、それぞれの金額対応力がありましょうが、建前として、全卒業者が応じやすい額で、アピールしてみては？」などがある。

また「図書館やスポーツジムの利用をオンラインで手続きできるサービスがあるとありがたい」、「公開講座、セミナー等への出席等を通じ母校との知的交流（双方向）」など**「施設などの利用」**に関する意見 4 件、「大学における基金の位置づけをその他の収入源と合わせて総合的に管理できる体制が整えば」、

「寄付に頼らなくても基金が自立運営出来る体制が出来上がること」など**「基金体制の充実」**に関する意見は3件がみられた。

以上の項目に当てはまらない**「その他」**の回答としては9件がある。たとえば、「判り易く読んで楽しい教育情報、研究情報の定期的な提供・送付」、「その時点の当方の財政状況」、「子供が東京大学に入学したら」などがある。

図表5－8　寄付を通じて東京大学を支援する条件（自由回答）

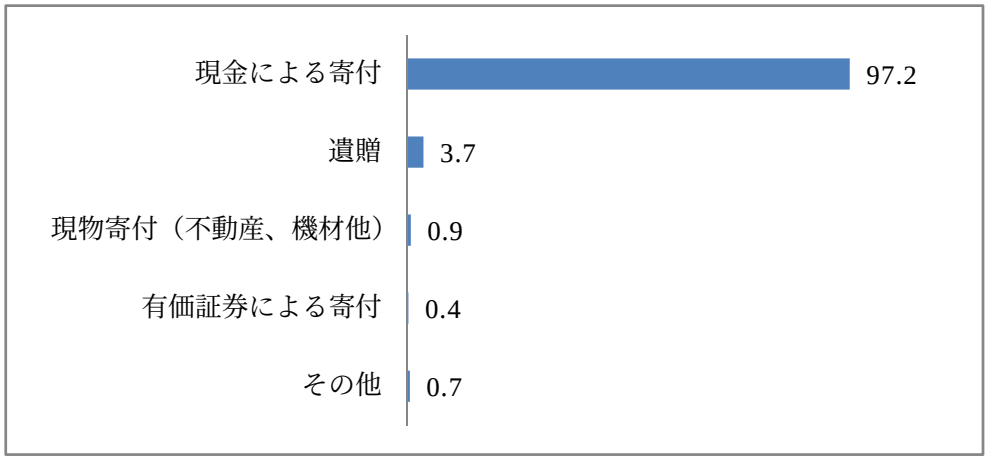


（N=74件）

２）寄付形態

寄付形態を尋ねるところ、「現金による寄付」がもっとも多く、97.2%で、次いで、「遺贈」3.7%、「現物寄付（不動産、機材他）」0.9%、「有価証券による寄付」0.4%、「その他」0.7%である（図表5－9）。

図表5－9　寄付形態（%）

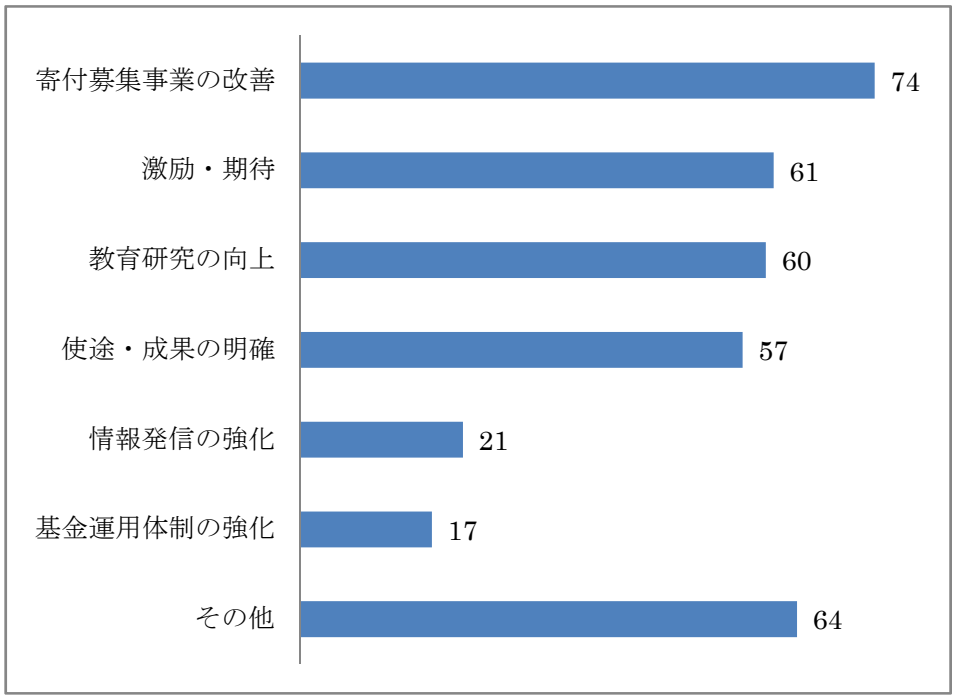


（N=671）

第６章　東京大学基金全般に対する意見・要望

寄付者から東京大学基金全般についての意見・要望に関する自由回答をまとめた結果は、次のようである。

図表 6－1　寄付者から東京大学基金全般についての意見・要望（自由回答）



（N=354 件）

「寄付募集事業の改善」に関する回答はもっとも多く、74 件である。たとえば、「東京だけでなく地方でも寄付を集めるのなら地方でも何かイベントを企画していただけると集まるのではないでしょうか。いつも東京でしかイベントがないのは地方にいる人にとっては結構淋しいことですし、東京までいつも行かなければいけないのは大変です」、「年金生活でもあり金融危機でもあり今後は寄付の余裕がない。対象を前期高齢者位までにしたらいかがですか」、「基金への寄付の最低金額の５万円は高すぎると思います。これでは他の東大卒業生へ紹介できません。また、毎年（あるいは毎月）一定額を自動的に銀行引落し（クレジットカードからの支払い etc）による方法で寄付できるようにされるべきだと思います。「卒業生は卒業後は寄付するもの」という伝統を築いて下さい（それに値する教育サービスも）」など。

「激励・期待」に関しては 61 件がある。たとえば、「活動が目に見えて活発化していることは大変結構。頑張ってください」、「東京大学の現在及び将来について多少なりとも役に立ちたいと思っている」、「キャンパス環境の整備をお願いしたくて寄付しました。最近の本郷キャンパスの整備はかなり進んできています。今後、三四郎池その他植栽の整備などにも取り組んでほしい。アメリカのハーバード大学や MIT のキャンパス環境に負けないものになればうれしい」、「基金の寄付は、母校愛・象徴であると思います。米国大学（コロンビア大学）に留学した者として、母校からの毎年の熱心な働きかけには、感激し、応じていました。東大基金は熱心にやればもっともっと、大きなサイズになること間違いありま

せん。頑張ってください」など。

「教育研究の向上」に関する回答は60件がある。たとえば、「時代を越えて日本のNo1 schoolとして国と国民をより良い方向にleadする存在であり続けそのための人材を育成するべき活動に貢献して欲しい。また国際交流を通じ会日本人としての自覚と誇りを持てる教育のために貢献して欲しい」、「東大は学生・卒業生とも数が多い。色々な面で評価されるが、目先のことでなく少なくとも十数年ごとの成果を評価基準とし、底力のある人の養成を目指して下さい」、「日本を代表する教育研究機関として現状の競争社会のみに適合する研究のみならず、継承すべき古典や芸能、思想、哲学などあるいは基礎科学、生態学、博物学などAcademyの根幹となる分野と独自にSupportする事が出来るよう益々の発展を祈念しています」、「幼い時からの受験戦争が激しくなって教育コストが高くなり貧しい若者が東大へ入ることがより難しくなってきているように思います。貧富に拘わらず日本人はもちろんですが、中国や韓国や東南アジア各国の優秀な若者が入学し学費や生活費にわずらわされることなく勉強や研究に励める大学であって欲しいと思います」など。

「使途・成果の明確」に関する回答は57件がある。たとえば、「基金の使用内容と出来ればその成果（結果）について正しく（細かい金額ということではない）知らせて欲しい」、「基金の使途について情報があれば再び寄付することへの動機が得られる」、「東京大学の教師、卒業生はもっと多くの日本人に頼られる大学になって欲しい。その環境作り、基礎作りに基金を集めて活用して欲しい。難しいが着実にやって欲しい」、「国立大学が国民に寄付を求めることの当否、妥当とすればその程度、範囲、対象等について納得が得られるような説明」など。

「情報発信の強化」に関する回答は21件である。たとえば、「東京大学基金の現状や活動を『赤門学友会報』などを通じて卒業生にもっとPRすべきだと思う」、「従来、東京大学の情報は殆どなかった。併し寄付の実態は諸外国に比べ甚だしく見劣りがします。折に触れ実情を漏承わることができますれば幸甚かと存じます」、「法人化し、より自律的な経営が求められている中で、こうした取り組みは有益だと思います。そうした意味では寄付金がどのように活用されているか等の情報提供を行いつつ、今後とも継続的な取り組みとして幅広く寄付を得られるように取り組みが続いていけばよいと思います」など。

「基金運用体制の強化」に関する回答は17件である。たとえば、「ワールドワイドで考えると、東大の財務的基盤は欧米の有名大学に比較してまだまだ見劣りする。卒業生を中心に基金を充実させ、教育、研究環境の一層の整備に役立てるべき。そのために一卒業生として今後も微力ながら協力したい」、「地道に基金を貯め外国の私立大学のように運用益で一定の活動が出きるようになれば理想的」、「本日駒沢大学の100億円を超える損失が報道されているが、運用に関してはローリターンでもよいからローリスクでお願いしたい」、「寄付金を国際、公社債、株式等で運用し、運用益の二分の一を東京大学基金に組入れ、残り二分の一を寄付者に毎年配当するようなしくみ（東京大学投資信託のような金融商品）を○○△△株式会社と共同で開発してほしい。短期的な利益追求には盛らずにバイアンドホールド方式で長期的な運用をする投資信託のような仕組みがほしい」など。

その他に、「東京大学は私のプライドとなっている。東京大学、豊島寮の同級生は私の生涯の友であり財産である」、「寄付者の情報が外部に漏れないよう、厳重な情報管理をお願いしたい」、「大学が寄付に頼らなくても目的が達せられる程度の財源保障が国によって成されるべきだと思う」、「寄付に頼る大学運営が健全とは思えない」「老齢で年金生活なので、寄付は厳しい」など上記の分類にあてはまらない**「その他」**の意見が64件みられた。

第７章　要約と結論

１．調査の目的と方法、回答者の属性

日本の大学では近年、大学の財務基盤の維持・強化を図る一手段である寄付募集に対する関心と取り組みが高まりつつある。しかし、実績が十分にあがっていない場合が多く、その一つの原因として、寄付者が大学に対してどのような関心を抱いており、どのような動機で寄付をするのかが十分に把握されていないという課題が明らかになった。

本ペーパーは、東京大学の渉外本部の協力を得て東京大学基金に寄付された個人を対象に実施した、寄付動機等に関するアンケート調査の集計結果をとりまとめたものである。調査票は 2008 年 10 月に個人の寄付者 4,104 名に送付され、うち 1,569 名より回答を得た（回答率は 38.2%）。回答者の属性については、70 歳代が全体の 30.3%ともっとも多く、次いで 60 歳代（23.7%）、80 歳代（17.7%）の順であった。性別では、男性が 82%を占めた。寄付の累計額は、30～99 万円（26.6%）、1～4 万円（24.7%）、5～9 万円（18.7%）となっている。

２．東京大学基金への寄付の動機

最初に東京大学基金への寄付の動機をたずねたところ、「東京大学（母校）に対する感謝の念」（58.8%）と「東京大学（母校）を支援したい」（58.7%）という“感謝”と“支援”の二つがもっとも多く、以下「東京大学に世界のトップ大学になって欲しい」（35.8%）、「基金の使途が明確だった」（22.0%）、「日本の高等教育及び／または産業の国際競争力を高めたい」（21.9%）の順であった（複数回答可）。「寄付に対する税制上の優遇措置の適用」は 16.4%であった。

“感謝”の具体的な中身（複数回答可）は「素晴らしい教育を受けることができた」（52.9%）、「友人から学ぶことができた」（50.2%）、「教育環境が整っていた」（44.4%）と教育関連であることが伺え、「東京大学卒業という肩書き」（31.9%）、「卒業生のネットワーク」（19.7%）等の回答を上回った。また、“支援”の対象に関しては「研究」（72.0%）と「教育」（66.3%）の二つが国際的活動（29.4%）やキャンパス環境の整備（27.0%）、情報発信や社会連携活動（16.4%）といったその他の回答よりも圧倒的に多かった（複数回答可）。

なお、寄付を決める際に留意した点（複数回答可）をたずねたところ、「寄付金額」（49.3%）との回答がもっとも多かった。

３．東京大学の同窓会と基金の募集事業に対する評価と要望

回答者がもっとも熱心に参加している同窓会は、「学部・学科・研究室・ゼミの同窓会」が 33.5%ともっとも多く、「運動会・サークル等の同窓会」が 11.7%、駒場クラス会が 11.2%となった。「特にない」との回答も 18.7%であった。

同窓会の活動が活発に行われていると思うかどうか、との問いに対しては全体の 60.0%が「思う」、22.0%が「思わない」との回答であった（残りは無回答）。「思う」を選んだ回答者がその理由としてもっとも多くあげた点は「同窓会の行事で同級生に会うことができる」、次に「同窓生に対して積極的に情報発信が行われている」であったが、「その他」を選び、「幹事が熱心」といった同窓会組織の熱心さをあげる

回答が多くみられた（複数回答可）。一方、「思わない」を選んだ回答者は「情報発信が少ない」「魅力的な行事が開催されていない」といった点をあげていた（複数回答可）。同窓会の活動に対する評価は、受け止め方によって分かれる模様である。

基金の募集事業に対する改善点としては、「特にない（現状のままで良い）」(39.3%)、「東京大学基金の現状に関する情報提供をもっと充実して欲しい」(26.8%)、「周年事業といった節目だけでなく恒常的な寄付の募集活動に注力すべきである」(21.5%) といった点であった（複数回答可）。

４．東京大学の支援に対する意志

過去の東京大学への寄付の回数（今回を除く）をたずねたところ、「0 回」が 49.9%と全体の半数を占めた。今回の東京大学基金への寄付が初めての経験だった寄付者が多いことがうかがえる。ところが、他の大学や団体等の寄付の経験をたずねると「ある」との回答が 70.6%に達した。具体的な対象先は、「ユニセフ」(54.4%)、「日本の他大学」(31.7%)、「その他」(30%)、「NPO 法人」(29.4%) の順に多かった（複数回答可）。「その他」として多くあがったのが、学会や協会、公益事業、出身小・中・高等学校であった。

今後の東京大学に対する寄付の意志に関しては、「寄付を考えても良い」と「条件が整えば寄付を考えても良い」がそれぞれ 42.8%、42.1%とほぼ同じ割合で並び、「寄付を考えない」は 10.5%にとどまった。「条件が整えば寄付を考えても良い」を選んだ回答者があげた「条件」としては、「東京大学の教育研究の充実」(48.2%)、「使途の明確化」(35.5%)、「寄付の優遇税制の拡充」(32.3%)、「東京大学からの頻繁かつ詳細な情報提供」(18.6%) であった。「その他」(14.8%) で、もっとも多く見られた条件は、経済状況であった。

５．東京大学基金全般に対する意見・要望

東京大学基金全般に対して寄せられた意見・要望は実に多種多様で傾向を示すのは困難であるものの、あえて単純化すれば「寄付募集事業の改善」、「激励・期待」、「教育研究の向上」、「使途・成果の明確化」に係る内容が多かったといえる。

東京大学基金への寄付に関するアンケート

＊　以下の設問に対し、該当する欄に○印を、数値欄には数値を、自由記入欄には自由にご記入下さい。

I.　東京大学基金にご寄付いただいた動機に関するご質問

【設問 1】東京大学基金に寄付下さった動機は何ですか（複数回答可）。

a	基金の使途が明確だった	（→【設問 2】へ）
b	寄付に対する税制上の優遇措置の適用	（→【設問 2】へ）
c	相続税対策として	（→【設問 2】へ）
d	事業承継対策として	（→【設問 2】へ）
e	東京大学関係者からの働きかけ	（→【設問 1-1】へ）
f	東京大学の同窓会からの働きかけ	（→【設問 1-1】へ）
g	東京大学（母校）に対する感謝の念	（→【設問 2】へ）
h	東京大学（母校）を支援したい	（→【設問 2】へ）
i	東京大学に世界のトップ大学になって欲しい	（→【設問 2】へ）
j	日本の高等教育及び／または産業の国際競争力を高めたい	（→【設問 2】へ）
k	その他（以下の欄にご記入下さい）	（→【設問 2】へ）

【設問 1-1】設問 1 において「e 東京大学関係者からの働きかけがあったため」または「f. 同窓会からの働きかけがあったため」と回答された方に伺います。東京大学関係者や同窓会からの働きかけがあった際に、どのような要因がもっとも大きかったとお考えですか（複数回答可）。

a	基金の目的や使途に関する説明が分かりやすかった
b	大学トップの強い決意が感じられた
c	その他（以下の欄にご記入下さい）

【設問 2】東京大学に対してもっとも感謝されているのは、どのような点ですか（複数回答可）。

a	素晴らしい教育を受けることができた
b	教育環境が整っていた
c	友人から学ぶことができた
d	東京大学卒業という肩書き
e	卒業生のネットワーク
f	親戚等が東京大学の関係者である
g	特にない
h	その他（以下の欄にご記入下さい）

【設問 3】東京大学のどのような点を支援したいとお考えになりましたか（複数回答可）。

a	教育	e	財務力
b	研究	f	キャンパス環境の整備
c	国際的活動	g	情報発信や社会連携活動
d	組織運営	h	特にない
i	その他（以下の欄にご記入下さい）		

【設問 4】東京大学基金への寄付を決められる際に留意されたのはどのような点ですか（複数回答可）。

a	寄付金額
b	家族に知られないようにする
c	他からの寄付の要請との選択
d	特に留意した点はない
e	その他（以下の欄にご記入下さい）

II. 東京大学の同窓会と基金の募集事業に対する評価と要望

【設問 5】あなたがもっとも熱心に参加されている同窓会はどれですか。一つ選んで下さい。

（注：設問 5～6　本学の卒業生ではない方も、よろしければご経験を踏まえて回答いただければ幸いです）

1	学部・学科・研究室・ゼミの同窓会
2	運動会・サークル等の同窓会
3	地域別同窓会
4	職域別同窓会
5	駒場クラス会
6	その他の同窓会
7	特にない

【設問 6】その同窓会の活動は活発に行われていると思いますか。

1	思う　（→【設問 6-1】へ）	2	思わない　（→【設問 6-2】へ）

【設問 6-1】設問 6 において「1. 思う」と回答された方に伺います。それはどのような点ですか（複数回答可）。

a	同窓生に対して積極的に情報発信が行われている
b	同窓会の行事が魅力的である
c	同窓会の行事で同級生に会うことができる
d	母校や学生への支援・関わりが深い
e	その他（以下の欄にご記入下さい）

【設問 6-2】設問 6 で「2. 思わない」と回答された方に伺います。それはなぜですか（複数回答可）。

a	情報発信が少ないから
b	魅力的な行事が開催されていないから
c	卒業年次の高い同窓生しか行事に参加していないから
d	会費が高い
e	母校や学生への支援・関わりが少ない
f	その他（以下の欄にご記入下さい）

【設問 7】基金の募集事業について改善すべき点があるとすれば、どのような点ですか（複数回答可）。

a	大学や学生との交流の場を提供して欲しい
b	寄附者間の交流の場を提供して欲しい
c	顕彰制度を充実して欲しい
d	周年事業といった節目だけでなく恒常的な寄付の募集活動に注力すべきである
e	使途に関して卒業生の意見をもっと採り入れて欲しい
f	東京大学基金の現状に関する情報提供をもっと充実して欲しい
g	特にない（現状のままで良い）
h	その他（以下の欄にご記入下さい）

III. 東京大学の支援に対するご意志について

【設問 8】過去に東京大学に寄付されたことがありますか（今回の東京大学基金は含みません）。

1	0 回	2	1 回	3	2 回	4	3 回以上

【設問 9】他の大学や団体等に寄付されたことはありますか。

1	ある　（→【設問 9-1】へ）	2	ない　（→【設問 10】へ）

【設問 9-1】設問 9 で「1. ある」と回答された方に伺います。対象は（複数回答可）。

a	日本の他大学	d	地域コミュニティ
b	外国の大学	e	ユニセフ
c	ふるさと納税	f	NPO 法人
g	その他（以下の欄にご記入下さい）		

【設問 10】今後、寄付を通じて東京大学を支援したいとお考えになりますか。

1	寄付を考えても良い	（→【設問 10-1】へ）
2	条件が整えば寄付を考えても良い	（→【設問 10-2】へ）
3	寄付を考えない	（→【設問 11】へ）

【設問 10-1】設問 10 において「1. 寄付を考えても良い」と回答された方に伺います。それはどのような寄付ですか（複数回答可）。

a	現金による寄付	c	現物寄付（不動産、機材他）
b	有価証券による寄付	d	遺贈
f	その他（以下の欄にご記入下さい）		

【設問 10-2】設問 10 において「2. 条件が整えば寄付を考えても良い」と回答された方に伺います。具体的には、どのような条件が整った場合でしょうか（複数回答可）。

a	寄付の優遇税制の拡充
b	相続税制の見直し
c	寄付に対する顕彰制度の充実
d	使途の明確化
e	寄付の運用益を毎年受け取れるようなスキームが開発された場合
f	自己保有の資産の運用益を定期的に寄付できるようなスキームが開発された場合
g	東京大学からの頻繁かつ詳細な情報提供
h	同窓会活動の活発化
i	東京大学の教育研究の充実
j	その他（以下の欄にご記入下さい）

【設問 11】東京大学基金全般に関してご意見・ご要望等ございましたら、自由にご記入下さい。

ありがとうございました。恐れ入りますが、差し支えなければ以下の記入にご協力賜れれば幸いです。

ご年齢	a. 20 歳代　b. 30 歳代　c. 40 歳代　d. 50 歳代　e. 60 歳代　f. 70 歳代 g. 80 歳代　h. 90 歳以上	性　別	男・女
ご寄付額（過去からの累計額をお答え下さい）	a. 1 万円未満　b. 1～4 万円　c. 5～9 万円　d. 10～29 万円　e. 30～99 万円 f. 100～499 万円　g. 500～999 万円　h. 1,000～9,999 万円　i. 1 億円以上		
ご芳名（任意）		お電話	
		メールアドレス	
寄付動機のインタビューを考えております。応じていただけますか。		a. 可	b. 否
東京大学の卒業生でいらっしゃいますか？	a. 卒業生である	b. 卒業生ではない	